

JICA's world

MARCH 2010 No.18

3

特集

アフリカ 新時代へ

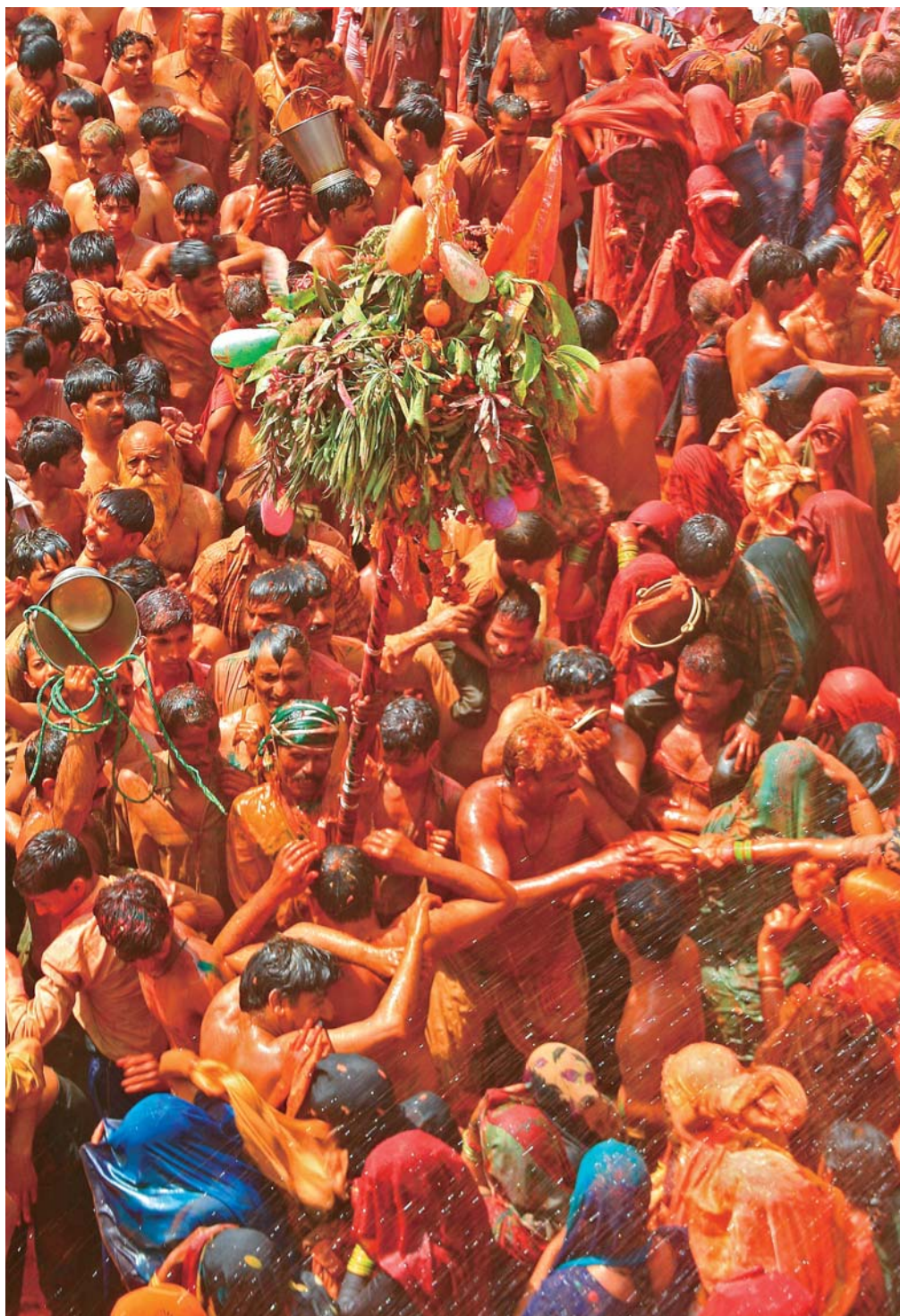




18

3月 ホーリー祭

色をかけて 愛を確かめ合う



3月の満月の日、インドでは春の訪れを祝う「ホーリー」が盛大に開かれる。この祭りでは、暖かい季節の到来を待ち望んでいたかのように、宗教やカーストに関係なく無礼講が許され、子どもも大人も色粉を投げ合ったり色水をかけ合ったりして戯れる。また、人々はパーティーをしてお菓子を食べ、お酒を飲んで、友人や隣人との友愛を確かめ合う。

インド全土で最も有名なのは、クリシュナ神の生誕地とされるマトウーラ、プリンダーヴァンにあるバカイビーハリ寺院で催されるホーリー祭だ。ヒンドゥー教の神クリシュナがプリンダーヴァンの庭園で宮廷の女性たちと色をかけ合って遊んだのが、始まりといわれている。そして、この地方には面白い慣習が残っており、女性はバケツに入った色水を男性にかけたり、服を引きちぎってひっぱたいたりする。これは、日ごろ我慢している女性たちが男たちに反撃しているといわれるが、クリシュナとその恋人ラーダーが戯れているようにも見えて、どこことなくほほ笑ましい。

ホーリーはまた、善が悪に勝ったことを祝う日でもある。かがり火をたき、悪い物を火にくべて、人間が日常で犯した罪をなくしてしまおうという意味もある祭りなのだ。

Contents

02 春夏秋冬 色をかけて愛を確かめ合う

04 特集 アフリカ新時代へ

独立後、新たな国づくりへ 植民地支配からの独立・建国の時代
激動、そして試行錯誤の時代 構造調整から貧困削減・援助協調の時代
“人”が“人”として生きていくために MDGs・人間の安全保障の時代
希望の大陸、再来 2010年から未来へ
成長するアフリカ経済MAP



©長倉洋海

20 ゲンバの風 菊池 佳 / 飯田 愛実 青年海外協力隊

22 PLAYERS HIV/エイズを予防し、
サッカーで夢と希望を
ソニー株式会社



24 地球号の子どもたち 小さなお店が届ける大きな真心
26 ココロとココロ 立ち上がるカンボジアの先生たち NPO法人環境修復保全機構
～届け 私たちの思い～
28 JICA に聞きたい! アフリカではどれくらいおコメが食べられているの?
29 JICA UPDATE
30 イチオシ!

31 地球ギャラリー マリ
生きている仮面
－仮面が導く魂の再生の物語－



39 MONO語り 地元女性のアイデアでフェルトの小物がヒット商品に!
40 MY ACTION 紺野 美沙子 女優



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

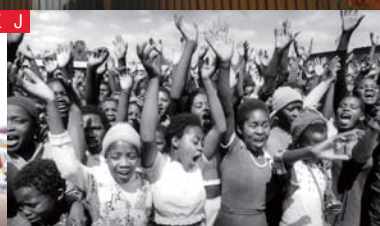
表紙 撮影：渋谷敦志

首都キガリに続く道を鳥の羽のように腕を
広げて走る青年。1994年にジェノサイド
(大量虐殺)を経験したルワンダでは、新し
い国づくりが着々と進められている





E. アフリカの玉米消費量は世界有数 ©今村健志朗
 F. ナイジェリアの港に停泊する大型貨物船
 © Danita Delimont/Alamy/PPS
 G. アフリカでは携帯電話の普及が急速に拡大
 © Charles Sturge/Alamy/PPS
 H/I. サッカーW杯の開催に向けて準備が進む南アフリカ共和国 ©久野武志
 J. 1980年、独立を喜ぶジンバブエの人々
 © Peter Jordan/Alamy/PPS
 K. 豪快な笑顔が印象的なモザンビーク人
 © 長倉洋海
 L. アフリカ51カ国が参加したTICAD IV



2010年は、アフリカにとって記念すべき年だ。

「アフリカの年」50周年—1960年、ヨーロッパ諸国による植民地支配からアフリカ17カ国が一気に独立を果たした。名実ともにアフリカのターニングポイントとなったこの年は、後に「アフリカの年」とも呼ばれるように—。それから半世紀、アフリカはどう変わったのだろうか。

「サッカーW杯、アフリカ大陸で初の開催」—今年6～7月にかけて、サッカーワールドカップが南アフリカ共和国で開催される。開催が決定してから、スタジアムの建設やインフラ整備など、精力的に準備が進められている。現地の盛り上がりは最高潮、世界中から注目を浴びている。

「TICAD IV フォローアップ中間年」—国際社会のアフリカ支援をリードすべく、日本は93年から5年ごとに「アフリカ開発会議（TICAD）」を開催。2008年に開催されたTICAD IVでは、対アフリカ政府開発援助（ODA）倍増と5年間の支援目標（フォローアップ）が決定された。アフリカの成長の加速化を目指し、各国は積極的な支援を展開している。

そして今、独立国53カ国から成るこの広大な大陸に、世界各国の企業も新たな投資先として進出し始めている。かつては「暗黒の大陸」と称されたアフリカ。15～19世紀の奴隷貿易から、ヨーロッパ諸国による植民地支配まで—。長く続いた迫害の歴史を経て、50年前の「アフリカの年」を契機に、アフリカは新しい時代に入れたのだった—。



アフリカ新時代へ

特集

編集協力：高橋基樹・神戸大学大学院国際協力研究科教授

「アフリカ開発会議（TICAD）」の歩み

<TICADI>1993年10月

国連、「アフリカのためのグローバル連合（GCA）」との共催
 参加国：アフリカ48カ国、援助国12カ国、国際機関など
 成果：「アフリカ開発に関する東京宣言」を採択。「アフリカ開発は国際社会が取り組むべき優先課題である」と表明された。

<TICAD II>1998年10月

国連、GCA、国連開発計画（UNDP）との共催
 参加国：アフリカ51カ国、その他29カ国、国際機関、NGOなど
 成果：「東京行動計画」を採択。社会開発、経済開発、良い統治・紛争予防と紛争後の開発の政策が合意された。

<TICAD III>2003年9月

国連、GCA、UNDP、世界銀行との共催
 参加国：アフリカ50カ国、その他39カ国、国際機関47機関、NGOなど
 成果：「TICAD 10周年宣言」と「TICAD 議長サマリー」を採択。平和の定着、人間中心の開発、経済成長を通じた貧困削減が提示された。

<TICAD IV>2008年5月

国連、UNDP、世界銀行との共催
 参加国：アフリカ51カ国、その他34カ国、国際機関74機関、NGOなど
 成果：「横浜宣言」を採択。農業開発、貿易・投資、観光の促進、産業開発、人材育成などに注目。5年間のアフリカ支援ロードマップ「横浜行動計画」を提示。



A. 大漁で活気づくアンゴラの港 ©長倉洋海
 B. セネガル首都ダカールの大渋滞 ©今村健志朗
 C. ボツワナのダイヤモンド鉱山から岩を搬出 ©Karin Duthie/Alamy/PPS
 D. 4月に大統領選が予定されるスーダン ©ロイター/アフロ

植民地支配からの 独立・建国の時代

AFRICA



1957年、サハラ以南アフリカの中で先立って、イギリス領ゴールドコーストが「ガーナ」として独立を果たした。ヨーロッパ諸国の支配から解放され、自らの足で踏み出した大きな一歩。60年にはカメルーンを先頭とし、1年間で17カ国が次々と独立。その経済も、アジアに並ぶだけの成長を見せ、「これからは我々の時代だ」と言わんばかりに、アフリカは夢と希望に活気づいた。この独立の勢いを後押しすべく、国際社会の支援も活発化。未知なる可能性を秘めた「希望の大陸」に注目が集まるようになった。日本も敗戦から奇跡的な復活を遂げ、高度経済成長で盛り上がりを見せていた時代。その勢いを新たな国づくりを生かそうと、アフリカ支援に乗り出すことになった。

現地の人々と汗を流した 青年海外協力隊員

1966年3月、JICAはアフリカ第一号となる青年海外協力隊員(建設機械2人、電気設備1人)を送り出すことに。協力

独立後、新たな国づくりへ

隊事業が始まって2年、アジアと合わせると5カ国目だった。最初の派遣国はケニア。政府は63年の独立後、道路や港湾、通信などのインフラ整備に注力する一方、海外からのボランティアを積極的に受け入れていたとこ

ろだった。

ケニア3代目の隊員(水産加工)の江藤誠一さんは、67年に初めてアフリカの地を踏んだ。「日本人にとって、アフリカといえば、**暗黒の大陸**というイメージが強かった。想像していたの

は、山川惣治が描くところの『少年ケニヤ』。ジャングルの世界でした。いくつもの国を経由し、3日かけて首都ナイロビに入った。しかしそこに広がっていたのは、夜明けの空に浮き上がる高層ビルのシルエット。「まさにそこは西欧の街。人々の顔も活気に満ちていたことが印象深く思い出されます」。

江藤さんの配属先は、首都の

北、約1000キロのところにあるルドフ湖(現在のトゥルカナ湖)のケニア水産局支局。湖で捕れる豊富な資源に付加価値をつけるため、水産加工技術を普及することが任務だった。首都とは異なり、そこにはまさにアフリカ、素朴な生活があった。テントで寝泊まりしながら漁村を調査したり、村人たちとともに、塩干やくん製の製造に励んだ。「加工品で現金収入を得られることが分ると、彼らの労働意欲は一気に高まりました」。

あれから40年。国際協力の世界でアフリカと付き合い続けてきた江藤さん。彼の頭に今でも残っている当時の印象は、文句一つ言わず黙々と仕事に臨む村人たち。「この姿に、私はアフリカの将来を感じました」。

人々の生きる糧となる 農業支援を

70年代に入り、JICAのアフリカ支援も徐々に多様化。73年にはケニア・モンバサ国際空港の拡張にアフリカ初となる円借款が供与され、インフラ整備、協力隊の派遣国拡大などが積極的に行われた。

40年以上、アフリカ支援に携わってきた日本工営株式会社専

務執行役員の有賀直記さんは当時を振り返る。「もちろんインターネットなんてありませんから、日本との連絡も郵便局にあるテレックスでした。橋を建設するにも現地では調達できない資材が多く、船で取り寄せていました。何をするにも時間がかかり、不便なことが多かった。一方で、「とにかく現地の人は、国家建設に燃えていました。みんな一緒にやっている。感覚がありましたね。本当によく働きましたが大変だとは思いませんでした」。

しかし、ニクソンショック※、オイルショックなどの影響を受け、アフリカでも農村部を中心に貧困問題が深刻化し始めた。この流れを受け、70年代後半からは、人間が生きていく上で最低必要とされる「ベーシック・ヒューマン・ニーズ(BHN)」が重視されるようになる。「人々が食べていける」ことが最優先。特に農業分野の支援に力を入れていました」。

JICAが70年代から開始した、タンザニア・キリマンジャロ州のローアモシ地区の農業支

タンザニア隊員が映画に!?

『アサンテサーナ／わが愛しのタンザニア』

1970年代の青年海外協力隊員の姿を描いた映画があるのをご存じだろうか。アフリカ旅行中、現地の人々とともに汗を流す日本の若者たち(協力隊員)に感銘を受けた谷口千吉監督が、タンザニアを舞台に劇映画『アサンテサーナ／わが愛しのタンザニア』を製作。協同農場で活動する日本人青年と農民たちの生活が描かれている。約1年かけて現地でロケが行われ、実際に当時の隊員や現地の村人も出演。その自然な演技が好評を博した。タンザニアの雄大な自然、日本人にとっては未開の土地だったアフリカで奮闘する隊員の姿を知ることができる貴重な作品だ。全国462カ所で自主上映され、協力隊事業が認知されるきっかけにもなった。

※JICA地球ひろばの図書資料室で貸し出し中。
遠方の方には郵送も可。
詳しくはこちら>>><http://www.jica.go.jp/hiroba/>

※1971年にアメリカのニクソン大統領が発表した新経済政策。ドルと金の固定比率変換が停止となり、世界経済に多大な影響を及ぼした。



(上) 1970年代から水路の設置が行われ、今ではキリマンジャロのふもとに水田地帯が広がる

(下) 1980年代に行われた幹線用水路のブロックライニング工事の様子(写真提供:日本工営株式会社)



(右上) アフリカ第一号隊員の古谷五郎さん(1966年建設機械)
(右下) タンザニアの初代隊員尾田稲子さん(1967年婦人子供服)

構造調整から 貧困削減・援助協調 の時代



激動、そして試行錯誤の時代



死者約100万人。干ばつと国内紛争による政府の不十分な対策で起きたといわれる、1984年のエチオピア大飢饉の犠牲者だ。これだけの人々が餓死したという現実には、世界中が衝撃を受けた。日々、メディアを通して伝えられる惨状に、アフリカに対する国際的関心は、「アフリカ＝飢饉」のイメージとともに高まる。そしてこれを機に、国際社会のアフリカに対する援助も、さまざまな動きを見せることになる。

継続する力に支えられた セネガルの地方給水整備

80年代から90年代にかけて、アフリカを中心に各国で導入されていたのが、「構造調整アプローチ」と呼ばれる政策だ。70年代よりアフリカ諸国が取り組んできた野心的な開発計画は円滑に進まず、オイルショックなど



約100万人が餓死したとされる1984年のエチオピア飢饉。アフリカ支援への国際的な機運が高まるきっかけとなった © Brian Lawrence/Rex/PPS

の国際環境の変化もあり、多くの国で国民生活に必要な輸入資金が枯渇していた。そこで、世界銀行や国際通貨基金といった国際金融機関が、引き続き融資

が必要な各国政府に資金を貸し付ける条件として、市場の自由化や政府機能の縮小を課したのだ。その狙いは、「政府による無駄な管理をなくし、自由な市

場・競争の原理に任せて経済成長を促すことで、受け取り国の返済能力を高める」こと。こうした援助潮流の中、日本も、世界銀行が実施する「構造調整融資」への協調融資などを通じ、アフリカ諸国の輸入資金を支える外貨支援を行った。

さらにこのころ、日本の開発援助のアプローチにも変化が訪れる。それまでは、インフラ建設など個々の開発事業をプロジェクト単位、援助手法単位で支援するのが一般的だった。しかし、そうした援助の実践・経験を重ねる中で、教育、保健、水などの開発課題を根本から改善、解決していくためには、課題をより包括的・長期的にとらえた援助を組み合わせる必要がある



水管理組合による井戸の維持・管理制度を普及するため、PEPTACで住民に啓発活動を実施する

ことを学ぶ。こうして、複数のプロジェクトや援助手法を組み合わせる「プログラム・アプローチ」という形式が主流化していく。その代表的な事例が、セネガルで長年にわたり実施されている地方給水支援だ。

多くの人々が地方での農業や牧畜で生計を立てるセネガルで、井戸は命にも等しい大切なもの。しかし、既存の水源の多くで水質悪化のために疾病がま

ん延したり、乾期に枯れてしまうなどの問題を抱えていた。また、老朽化や給水能力不足のため、それらが有効に活用されていないことも多かった。そんな中、日本は79年より、既存の井戸を水源として活用し、ポンプ、貯水施設、配水管路、共同水栓などの給水施設全般を整備・改修する無償資金協力を実施してきた。これまでに119カ所の村落で協力を実施し、その恩恵

は、37万人近い人々と、彼らの生活に不可欠な家畜約77万頭に及ぶという。

一方で、地域の人々がいつまでも安心して水を使い続けるには、定期的な点検やメンテナンスといった、住民自身による給水施設の適切な維持・管理が欠かせない。そこで、99年からは住民参加型の利用者水管理組合による井戸の維持・管理制度の確立・普及を支援するJICA

の「安全な水とコミュニティ活動支援計画（PEPTAC）」を展開。「命の源」である水を住民が一致団結して守り、村の生活改善につながるよう、組合の運営にかかるアドバイスや、設備管理に必要な技術面での指導などを行っている。

「安全な水を継続的に使えるようになるということ。それは、多くの女性や子どもを水くみから解放し、彼らの社会参加を促すということにもつながる」と、黒川恒男・元JICAセネガル事務所長は話す。かつては、農村人口の約半分が安全な水にアクセスできず、水くみに従事する多くの女子が重労働に苦しみ、学校に行く機会を奪われていた。

開発コンサルタントとして、約30年間現地の給水施設を整備し、またPEPTACで水管理組合の強化にも携わってきた日本テクノ株式会社、高松章二・代表取締役は、「セネガルの水行政はもちろん、エンドユーザーである住民の声にも耳を傾け、信頼関係を構築しながら長年築き上げてきた日本の姿勢と努力は、現地で深く受け入れられている」とその成果を実感している。

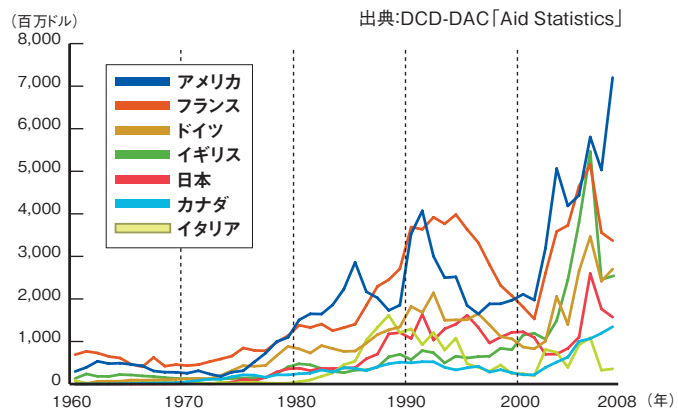


工具を用いたポンプの修理方法を学ぶ水管理組合の人々



援助効果を高めるため、ASDPによる調整会議の場で、現地政府と各ドナー間の議論が続く

■主要国の対アフリカ援助実績(1960~2008年)



タンザニアでは、長年支援してきたJICAのキリマンジャロ州での人材育成モデルの経験が評価され、今では援助協調の枠組みの中で、全国への普及が進められている

せ、援助が最大限の成果を生み出すよう、ASDPの議論と取り組みをリードし続けてきた。「援助協調の中で、JICAの長年の農業分野での経験は大きいに生かされている」と話すのは、元タンザニア事務所次長で、かつてASDPの枠組みづくりにかかわってきた古川光明・JICA研究所上席研究員だ。JICAがキリマンジャロ州で展開してきた農業人材育成モデルは、現地政府もその効果を認め、現在はそれを全国に拡大すべく積極的な後押しを続けている。牧野耕司・元タンザニア事務

所次長も、「援助協調の場で、机上の論理として、例えば『いつまでに灌漑施設の整備計画を作ろう』と言うのは簡単。でも実際に、それがどれほど大変で、どんなメンテナンスが必要なのかといった、リアリティーのある視点が欠かせない」と、JICAが持ち込む現場の視点の重要性を強調する。70年代から積み上げてきたJICAの経験。それが今、現地政府の手で中央の政策に生かされ、援助協調によつて効果を高めながら、タンザニア全土の地域・人々に広がっている。

貧困の拡大と援助疲れの克服へ

90年代に入ると、アフリカ援助の主流となっていた構造調整アプローチは、市場開放のスピードに比べ、国際競争力のある産業育成が進まず、期待とは裏腹にアフリカ経済の停滞を招き、各国の債務も増大した。また「政府の縮小」により、公務員の数や教育・保健分野の予算・補助金などが削減された結果、政府のサービスで恩恵を受けてきた貧困層や社会的弱者が置き去りにされ、貧富の格差が一層

拡大する。国際社会では、東西冷戦体制が終結し、かつて東西陣営の勢力争いの場でもあったアフリカへの地域的・戦略的関心が低下。欧米諸国の経済停滞の影響も重なり、「援助疲れ」によつてアフリカ支援そのものが不調に陥ることに。さらに、民族的・宗教的な対立や資源の利権争いをもとに各地で紛争が頻発したり、HIV／エイズのまん延が深刻化するなど、アフリカは厳しい時代を迎えることとなる。そんな中、日本は、国際協調の枠組みの中で各国の経済運営



アンゴラ内戦で負傷した兵隊(1993年) ©Jack Picone/Alamy/PPS



1998年に開催されたTICADIIで基調講演を行う小渕恵三首相(当時) ©時事

を見守りながら、債務返済期間の延長などによつて、多額の債務を抱えていた国々の債務負担を軽減した。また、減少が続いていたアフリカ支援に歯止めをかけ国際的なアフリカへの関心を呼び戻すべく、93年に第一回アフリカ開発会議(TICAD I)を開催。アジアの発展をけん引してきた日本の経験に対するアフリカ諸国からの期待が集まる中、アフリカの「オーナーシップ」(自助努力)と国際社会の「パートナーシップ」(協調)の重要性を訴える。さらに、98年のTICAD IIでは、アフリカとドナー側とが支援の目的と必要な行動を定めた「東京行動計画」を採択する。

現場の経験をタンザニア全土に

一方、国際社会でも構造調整アプローチの限界に対する反省から、人々の貧困削減に直接焦点を当てた支援が重視されるようになる。そして、重債務国の救済策が進められるとともに、その条件として世界銀行がアフリカ各国に貧困削減戦略文書(PRSP)※の作成を求めることに。以降、PRSPの方針のもと、現地政府と各ドナーが開

発戦略を共有し、限られた援助リソースを効率的に利用しながら、より効果的な援助の実現を目指して協働する「援助協調」が活発化する。

そうした流れを受け、JICAがほかの援助国や国際機関、現地政府などと連携しながら、人々の貧困削減に取り組んでいるのが、タンザニアの農業セクターにおける包括的な支援だ。タンザニアでは人口の約8割が生計を農業に頼り、GDPでも約半分を農業が占めるが、一方で天候に依存する小規模な自作農が多く、人々の収入も不安定だ。そこで日本は、コメの収量拡大と人々の生計向上を図るため、70年代より北部キリマンジャロ州を舞台に、灌漑施設の整備や技術移転に長年取り組んできた(6ページに関連記事)。そして90年代後半に入ると、援助国や国際機関の間で、PRSPの枠組みのもと、農業分野でも援助協調によつて効果的な支援を実施しようという機運が高まる。JICAは、その枠組みとなる農業セクター開発プログラム(ASDP)の政府・ドナー間の調整役に名乗りを挙げ、以来、政府への財政支援やさまざまな技術協力を効果的に組み合わ

※経済成長や雇用促進、教育や保健といった公的サービスの改善など、巨額の債務を抱える貧困国が自ら貧困削減を実現していくために必要な政策・戦略を定めたもの。

MDGs・人間の安全保障の時代

AFRICA



MDGsが採択された国連ミレニアム・サミットには、世界189カ国から代表者が集まった（読売新聞社提供）

“人”が“人”として生きていくために

世界中の誰もが新たな時代の到来に歓喜していた2000年、ニューヨークで国連ミレニアム・サミットが開催された。世界各国の代表者が集うこの場で、新たな開発の方向性として採択されたのが「ミレニアム開発目標（MDGs）」。

国際社会が一丸となり、いかに世界の貧困問題と向き合っていくべきか。教育、保健医療、水、環境などの社会開発の分野を中心に、2015年までに達成すべき目標が設定されたのだ。そして同時に、開発の焦点を“国家”ではなく“人々”に当てた

「人間の安全保障」の概念が普及。紛争や感染症などの脅威から一人一人を守り、そして、自ら乗り越えていけるような“人づくり”の支援に目が向けられるようになった。

学校運営を通じて住民のポテンシャルを引き出す

MDGsの教育分野の目標として掲げられたのは、「すべての子どもが初等教育を受けられるようになること」。しかし当時、サハラ以南アフリカでは、初等教育の純就学率はわずか58・2%（2

000年）。卒業できるのはその6割に満たなかった。学校、教室の数が足りない、教科書、ノートも人数分ない。ただそこにいるのは、学校に行きたくても行けない子どもたち。

そうした状況の中で日本は、教育支援に乗り出すことに。その先駆けとなったのが、2004年からニジェールで実施されているJICAの「住民参画型学校運営改善計画（通称みんなの学校プロジェクト）」だ。プロジェクトの初代チーフアドバイザーを務めた原雅裕JICA客員国際協力専門員いわく、「すでに住民の間で、教育の重要性は十分に認識されていた。大人たちにも、子ども

校舎やトイレの建設、補習授業の制度化などが導入された。「住民」と政府をつないでいくことも重要でした」と原専門員は強調する。実際、現場の盛り上がりを目の当たりにした教育関係者により、学校運営委員会の取り組みが国の教育政策にも反映された。プロジェクト開始から6年余り。住民たちによる「下からの改革」は、ニジェール全土に広まり、さらには、セネガル、マリ、ブルキナファソでも各国版「みんなの学校プロジェクト」が進行している。

しかし時を同じくして、JICAはアフリカで新たな「挑戦」に立ち向かうことになる。1980～90年代、紛争の影響により撤退せざるを得なかった、スーダン、コンゴ民主共和国（以下

復興支援―新たな挑戦の時代へ

住民の誰もが参加できる学校運営を。そう考えた原さんが注目したのは、校長、教師、地域の代表などから構成される「学校運営委員会」の能力強化だ。透明性のある組織にするため、委員の選定は住民による投票制を採用、学校や地域の問題について話し合う住民総会を定着させた。すると、「学校」という場を通じて、住民たちのポテンシャルが引き出され、

学校運営委員会の委員を選んだり、住民総会に参加したりすることで、学校運営への参加意識も高まる



学校運営委員会の委員を選んだり、住民総会に参加したりすることで、学校運営への参加意識も高まる

コンゴ（民）駐在員事務所初代所長を務めたJICAアフリカ部・飯村学課長によると、「首都といっても、電話はおろか、まともな道路もないし、銀行も機能していない。外に出ると、あちこちに人があふれ返っている状態です。大統領選挙後まで銃撃戦が繰り返されてきたこともあ

コンゴ（民）に、再び支援の根を下ろすことになったのだ。両国の活動の拠点として、07年にはスーダンの首都ハルツーム、コンゴ（民）の首都キンシャサに駐在員事務所が開設された。

だがその道のりは、想像以上に厳しいものだった。長年の紛争による混乱を経て、両国はほとんどどの地域で政治もインフラも壊滅状態。教育、保健などの社会サービスも、まったくと言っていいほど機能していないのだ。何をするにも一筋縄にはいかなかった。

コンゴ（民）駐在員事務所初代所長を務めたJICAアフリカ部・飯村学課長によると、「首都といっても、電話はおろか、まともな道路もないし、銀行も機能していない。外に出ると、あちこちに人があふれ返っている状態です。大統領選挙後まで銃撃戦が繰り返されてきたこともあ

り、どこにいても緊張が途切れませんでした。何よりも重要とされたのは、スタッフの安全性を確保し、活動を開始できる環境を整えること。電話網もなく、インターネットも普及していなかったため、初めは政府関係者とアポイントも取れない。会ってもらえるまで、何日も、何時間も省庁で待ち続けることもあった。「ある専門家の方からお聞きした言葉ですが、平和構築の過程にある国を支援することは、泥船に乗って航海に出るようなもの。泥水が入ってきてても何度でもかき出し、必死で前に進んでいかなければならない。JICAが他の途上国で行ってきた支援とは異なる『覚悟』が求められています」（飯村課長）

復興国に平和が定着するまでには相当な時間と労力を要する。事務所開設から2年半、警察の民主化研修や除隊兵士の職業訓練など、スーダンとコンゴ（民）ともに、地道に取り組んできたプロジェクトが少しずつ実を結びつつある。一日でも早くすべての人に平和な時が訪れるよう、JICAは困難を乗り越え、現地の人々とともに歩んでいかなければならない。多難の先に見える、明るい光に向かって――。

コンゴ（民）首都キンシャサの主要道路（左）と小さな露店。インフラが壊滅状態の中でJICA駐在員事務所の立ち上げが行われた



（右）コンゴ（民）の治安維持を支援するため、JICAは「警察民主化研修」を実施（左）南部スーダンのジュバ職業訓練センターで学ぶ訓練生たち。国の未来は、技術を身に付けた彼らの手にかかっている





日本の無償資金協力で2002年に完成した新チルンド橋を渡るトラック

そして今、OSBPを整備する日本の協力が、「南北回廊」上に位置するジンバブエーザンビア国境のチルンドを舞台に行われている。アフリカ最大の貨物取扱量を誇る南アフリカ共和国のダーバン港から近隣諸国の主要都市へと続く南北回廊。まさに南部アフリカの大動脈ともいえるルートだ。近年は、銅の輸出が好調なザンビアの影響で交通量が増加。チルンドでも1日に200台を超える貨物トラックが往来し、特にジンバブエからザンビアへと向かう北上ル

ートでは国境通過に約2日間を要していた。チルンドでの日本の協力は1997年にスタート。両国の国境線となるザンベジ川にかかる旧橋の老朽化に伴い、無償資金協力で新チルンド橋を建設。さらに07年より、イギリスとともにOSBP導入に向けた支援を本格化させ、国境施設の建設、二国間協定の締結、国内法の整備などに取り組んだ。09年からは、両国の国境職員を対象にOSBPの運用方法などに関する研修も実施。そして09年12月、こうした支援が実を結び、アフリカ初のOSBPの運用がチルンドで始まった。これにより、

**物流の大動脈にOSBP
輸送コストの低下を**
アフリカの成長の加速化と持続的な経済発展を押し進める原動力として、今、注目されているのが、複数の国々を結ぶ国際道路網や電力網といった広域インフラの整備だ。日本も主に円借款を通じて、貿易の玄関港と内陸国とを結ぶ「経済回廊」、水力発電施設や送配電網など、アフリカの成長の基盤として不可欠なさまざまなインフラの整備

に力を入れている。特に経済回廊は、物流の「大動脈」として大きな期待を集める。だが、その際に大きな課題となっているのが、国境を超える際の税関などの手続きの問題だ。信じがたい話だが、アフリカの国境越えは2〜3日かかるのが当たり前。中には10日間待つ場所もある。手続きの煩雑さ、国境職員の能力不足、国境施設の未整備などがその弊害となり、こうした時間的ロスによって膨らんだ輸送コストがアフリ

カ製品の国際競争力の低下を招いている。その中で、日本をはじめとした国際社会の注目の的が、「ワンストップ・ボーダーポスト（OSBP）」。それまで二カ国が別々に行っていた税関手続き、検疫、出入国審査を両国が共同で実施し、一度で済ませるとい



OSBPが導入される前に撮影されたチルンドの様子。越境手続きに時間がかかるため、常にトラックが滞留していた

希望の大陸、再来

石油、天然ガスをはじめ、最近では先端産業に不可欠なレアメタルが注目されるなど、世界経済の動向を左右する多くの資源に恵まれるアフリカ。これらの資源開発の拡大と資源価格の高騰、海外直接投資の急増に伴い、2000年以降、アフリカは着々と経済成長の歩みを進めてきた。さらに、9億人を超える巨大市場の持つ可能性は、国際社会の大きな関心を集める。08年に起きた世界金融危機の影響は少なくないが、一部ではすでに回復の兆しも見えている。今後、いかに持続的な成長と発展を実現し、その恩恵を貧しい人々のもとへと届けていくのか、その動向に世界中が熱い視線を送る。



チルンドOSBPに完成した新しい貨物ターミナル。「OSBPは越境時間を大幅に短縮するだけでなく、道路整備と比較しても経済的で、費用対効果の面でも有効」(吉田さん)



(右) 入管、税関など、すべての手続きをここで行えるワン・ルーフ・システムを採用した新施設
(左) 09年12月、OSBP施設の開通式で顔を合わせた、バンダ・ザンビア大統領(左端)とムガベ・ジンバブエ大統領

既存灌漑施設の復旧・整備、住民による水利組合の強化などを実施しているほか、専門家や青年海外協力隊が、乾燥や害虫に強く収穫量の多い「ネリカ米」※2の普及も進めている。そして、貧困削減と同時に、MDGsにも名を連ねる教育や保健医療分野でもJICAは協力を展開。基礎教育の就学率と質の向上や、医療従事者の育成、乳幼児・妊産婦死亡率の改善、HIV／エイズや結核、マラリアの三大感染対策などを強化している。

こうした幅広い支援の中でも、JICAが変わらず重視してきたのが「人づくり」だ。その一つに、戦後、日本の製造業部門の飛躍的發展に貢献した品質管理（5S※3や「カイゼン」の手法を活用した「きれいな病院プログラム」がある。アフリカ15カ国を対象に07年から実施されているこの協力では、5Sやカイゼンを病院管理に取り入れ、スタッフの自主的な取り組みと創意工夫を促しながら、職場環境の改善や医療サービスの質・安全性の向上を図っている。研修では、各国の病院代表者と保健省行政官が、日本の医療現場に加え、5Sを取り入れて成



ウガンダの農業試験場で、日本人専門家の指導のもとで栽培されているネリカ米。食料不足の解消と農民の生活向上に役立つと期待されている（撮影：篠田有史）

農産物の商品価値や生産者の生計の向上など、輸送時間短縮によるさまざまな波及効果が期待される。

「まさに試行錯誤の連続でした」と話すのは、NEPAD※1事務局にアドバイザーとして派遣された吉田憲正JICA専門家（当時）。アフリカではまだOSBPの先行事例がない上、

JICAにとっても国境施設のソフト面での支援は初の試みだったのだ。

「調査をもとに、手探りでOSBPの土台を構築していきました。税関や検疫など、越境手続きには多くの省庁や組織がかわります。各機関との調整や合意を積み重ねて国内法の原案を作成し、両国の国会で通過・

施行させるまで、とても長い道のりでした」と振り返る。

JICAは、OSBP運用開始に伴いチルンド周辺コミュニティの環境整備も開始している。チルンドでは、手続きを待つトラック運転手たちも使用する水・トイレ・シャワーなどの衛生施設の未整備、ごみ回収システムの不備など、コミュニティ環境に多くの課題を抱えている。その上、運転手を目当てとした売春行為が増え、HIV／エイズの感染拡大も深刻化している。JICAは、こうした課題解決に向けた状況把握、問題分析、改善策の検討のために、2010年2月には短期青年海外協力隊を現地に派遣した。

アフリカの明るい未来を築くために

近年の経済成長の陰で、アフリカには今も1日1回の食事も事欠く貧困層が多い。増加する人口、そして1990年代後半から拡大し続けるコメの需要―。2010年の今も、食料自給率は上昇せず、多くを輸入に頼っているのが現状だ。

こうした食料不足を解消し、貧困削減に向けた支援として期待されているのが、稲作振興だ。

功した事例として知られるスランカの病院などを訪問。帰国後、研修中に作成した活動計画をもとに、各国でパイロット活動や、5Sの手法を紹介するガイドラインの作成を行っている。

「病院内が目に見えて清潔になった」と患者から評判なのは、タンザニア南西部・ムベヤ病院。かつては廊下がモノでふさがっていたり、使用前後の医療器具が混在するなど、病院環境や医療の安全性などの面で多くの問題を抱え、スタッフの意識も低

かった。しかし、プロジェクトを通じて施設内の整理整頓が徹底され、カルテの管理や医療廃棄物の処理も適切に行われるようになった。また、職場環境が改善されたことで、スタッフのモチベーションの向上と、アフリカの医療分野の課題である人材の定着にもつながっていくと考えられる。タンザニアでは、ムベヤ病院の取り組みをモデルとし、保健省が国内各地の病院へ同様の手法の普及を進めている。

サハラ以南アフリカに住む約

4割の人々が1日1ドル以下で生活するなど、依然多くの課題を抱えるアフリカ。2015年に向けたMDGs達成への見通しも厳しいとされる。だが一方で、豊富な資源に支えられた経済成長や、南アフリカ共和国で開催されるFIFAワールドカップに象徴されるように、新時代の幕開けを予感させるさまざまな動きが各地で生まれている。底知れない可能性に満ちた、希望の大陸・アフリカ。新時代への飛躍に向けた大いなる挑戦に、今後も注目していきたい。



「きれいな病院プログラム」で福岡県飯塚市の飯塚病院を視察するアフリカの研修員

かつては乱雑だったムベヤ病院のカルテ棚（左）も、今では「5S」の導入により整然と管理されている（右）。わずかなミスが命を左右する医療現場だからこそ、こうした業務環境の改善が不可欠だ



※1 2001年にアフリカ自身がアフリカ再生のために立ち上げた開発イニシアチブ。インフラ整備を経済成長と地域統合促進の一手段とし、国際社会の支援を受けながら複数国に裨益するインフラ整備事業に取り組んでいる。
※2 'New Rice for Africa'の略。
※3 業務環境を改善するための「整理・整頓・清掃・清潔・しつけ」からなる5段階のプロセス。

チルンドでは、地方農村からモノを売りに来る人々によって小さな市場が形成されているが、屋根や壁がなく、今はビニール袋で雨風をしのいでいる状態。今後のコミュニティ支援を通じた施設整備に期待が寄せられる



Column1

日野 博之氏
(ケニア首相府経済アドバイザー)



“真”の成長へ
3つのカギ

マクロ的に見ると近年のアフリカ経済は好調。だが、一般国民の生活は改善されていないのが実情。つまり、格差だけが肥大化しているということだ。

アフリカが本当の意味で成長するためのカギは3つ。一つは、域内貿易の拡大。経済成長を担うのは国際貿易に限らない。すでにケニアでは輸出の4割が域内向けとなっている。2007年末の暴動とその翌年の金融危機から、ケニアが国家存亡の危機を免れた一因は、欧米への輸出の依存度がそれほど大きくなかったことだ。

もう一つは、気候変動対策。降雨のサイクルが変化したり、干ばつが続いたり、アフリカは水不足に陥り、産業が成り立たなくなっている。そうした変化に適応していくために、例えばケニアなら地熱開発というような比較優位性のある産業を各国で育成していくことが重要になる。

3つ目は、政治の安定。コンゴ民主共和国をはじめとした、豊富な資源を保有する国々が安定すれば、いろいろな可能性が開けるはずだ。

Column2

倉科 芳朗氏
(JICAケニア事務所次長)



国境手続き、
ワンストップ化の
必要性

「アフリカは物価が高い」とよくいわれるが、その一因が輸送コスト。道路や橋などのインフラの未整備（ハード面）に加え、国境越えの手続き（ソフト面）に2～3日もの時間を要しているためだ。特にアフリカには小国が分立する上、15もの内陸国が存在し、貿易や産業振興の障害となっている。

こうした国の経済を活性化させるには、越境交通をスムーズにし、大きな都市や港などへのアクセス改善が重要。JICAでは、第4回アフリカ開発会議で表明された越境インフラに対する研究と支援を続けてきた。ソフト面の支援策としては「ワンストップ・ボーダーポスト(OSBP)」を推進。出入国に2回必要となる越境手続きが1度で済む国境施設を整備すると同時に、法制度整備、職員の育成、両国の税関システムの統一化を図っている。さらにハード面でも、主要な経済回廊(道路や橋など)の整備も行っている。その成果として、2009年12月にザン比亚ージンバブエ国境のチルドで運用がスタートしたアフリカ初のOSBPが、各国から注目を集めている。(P14に関連記事)

Column3

藤井 昌美氏
(JICAよりアフリカ開発銀行に出向中)



現地から見た
開発ニーズ

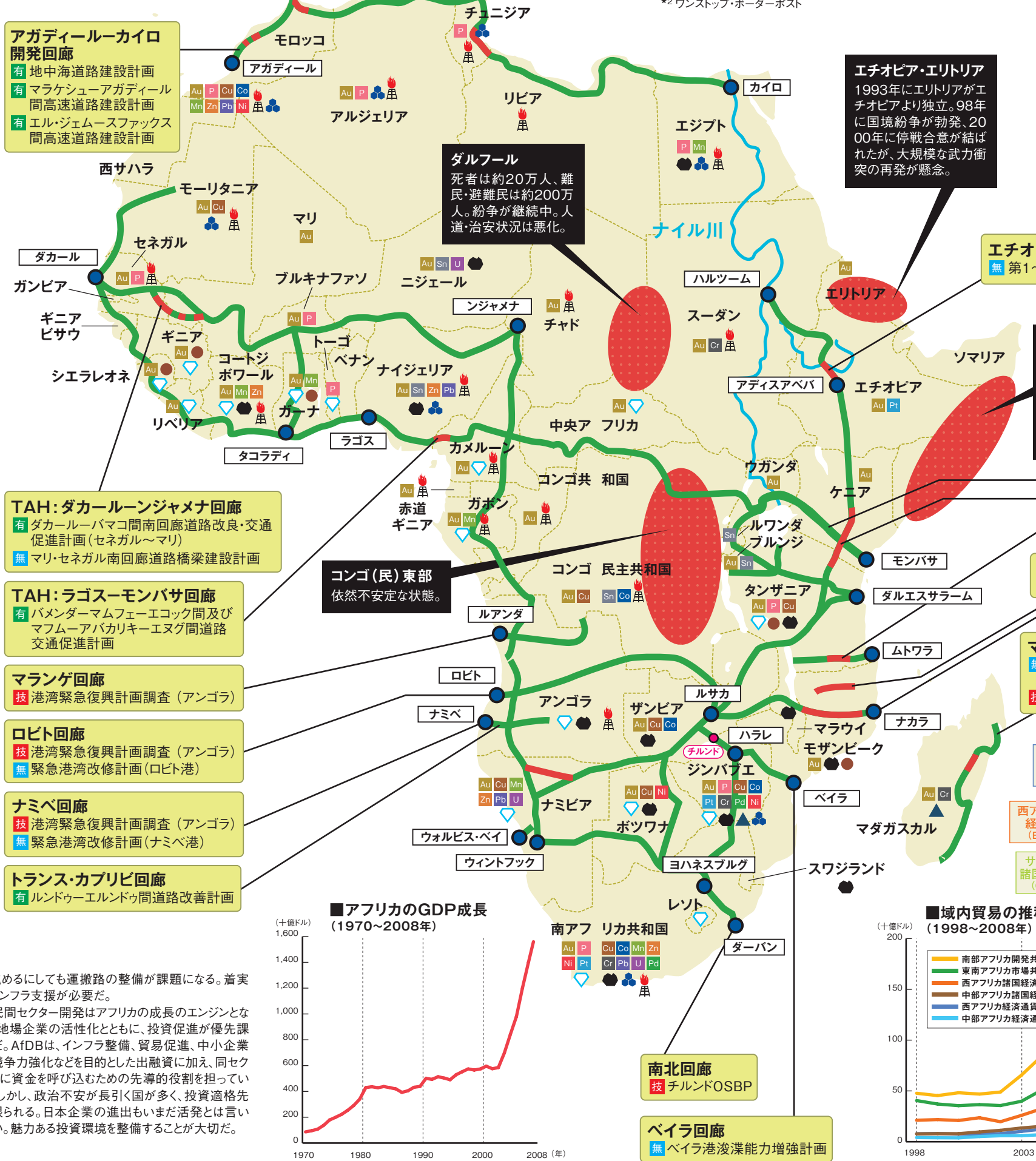
アフリカが直面するチャレンジは大きい。その中でもアフリカ開発銀行(AfDB)では、インフラ、民間セクター開発、ガバナンス強化に力を入れ、私が担当する「アフリカの民間セクター開発のための共同イニシアチブ(EPISA)」も、まさにこの重点分野を支援している。

インフラは経済発展の基礎。しかし、電力普及率で色分けした地図を見ると、北アフリカ地域と南部以外はほぼ真っ暗。陸続きのアフリカにとって重要な道路も維持管理が不十分で、民間資金で資源開発

【アフリカに眠る資源】

Au 金 P リン Cu 銅 Sn スズ Co コバルト Mn マンガン Zn 亜鉛 Pt プラチナ Cr クロム Pb 鉛 U ウラン Pd パラジウム Ni ニッケル
石油 石炭 ダイヤモンド ポークサイト 黒鉛 鉄鉱石

● 情勢が不安定な地域



【主な経済回廊とJICAの支援(実施中)】

経済回廊 日本の支援事業が含まれる回廊

技術協力 無償資金協力 有償資金協力

*1 アフリカ国際幹線道路(Trans African Highway)

*2 ワンストップ・ボーダーポスト

エチオピア・エリトリア
1993年にエリトリアがエチオピアより独立。98年に国境紛争が勃発。2000年に停戦合意が結ばれたが、大規模な武力衝突の再発が懸念。

エチオピアスーダン回廊(TAH:カイローハボロネ回廊)
第1～3次幹線道路改修計画(エチオピア)

ソマリア
1991年以来、無政府状態。AUソマリア平和維持部隊の展開が遅れており、同部隊の増強の必要性を論議。

北部回廊
(TAH:ラゴスモンバサ回廊)
モンバサ港開発計画

TAH*:カイローハボロネ回廊
アルーシャーナマンガーアティ川道路改良計画
ナマンガOSBP*

ムトワラ回廊
マサシーマンガッカ間道路整備計画(タンザニア)

ナカラ回廊
バラカーサリマ間国道5号線橋梁架け替え計画(マラウイ)
ナンプラークアンバ間道路改善計画(モザンビーク)
クアンバーマンディンバ間道路事業準備調査(モザンビーク)

マダガスカル SDI
首都圏南部地区接続道路建設計画
トアマシナ港拡張計画調査

西アフリカ経済通貨同盟(UEMOA)

西アフリカ諸国経済共同体(ECOWAS)

サヘル・サハラ諸国国家共同体(COMESA)

アフリカ連合(AU)

アラブ・マグレブ連合(UMA)

政府間開発機構(IGAD)

東アフリカ共同体(EAC)

東南アフリカ市場共同体(COMESA)

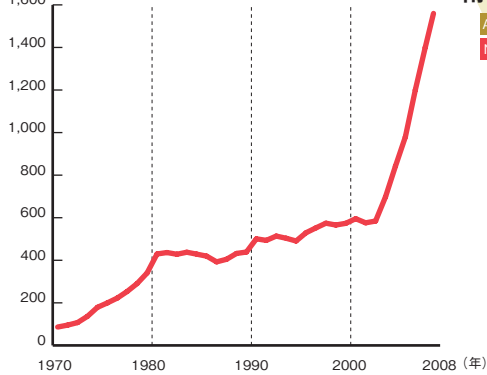
南部アフリカ開発共同体(SADC)

南部アフリカ関税同盟(SACU)

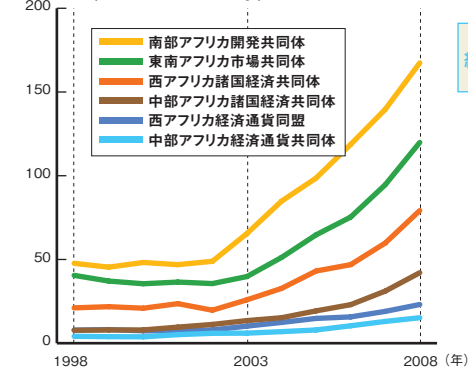
中部アフリカ諸国経済共同体(ECCAS)

中部アフリカ経済通貨共同体(CEMAC)

■アフリカのGDP成長
(1970～2008年)



■域内貿易の推移
(1998～2008年)



かけがえのない 海洋環境を持つ国

軽快な音楽をBGMに、カメラが海中を泳いでいく。色とりどりの魚たち、揺らぐ海草、サンゴ、カニ、エビ、ヒトデ…。青年海外協力隊の菊池佳さんが、ケニアの海の魅力を子どもたちに伝えるために手作りしたDVD教材だ。「みんな夢中で見入っています。こんなにきれいで、素晴らしい海が近くにあるのに、子どもたちはほとんど知りません」。

菊池さんの配属先はWCK (Wildlife Clubs of Kenya)。青少年への環境教育を目的に1968年に設立されたNGOだ。活動の拠点はケニア第二の都市モンバサ。ヨーロッパから多数の観光客を迎えるリゾート地でもある。

「僕の家は近くに、40分ほどで歩けるビーチがあります。でも、地元の人が行けるのは端と端だけ。その間のビーチは豪華なホテルに警備されていて、そこからわずか30分足らずのモンバサ海洋国立公園について知るケニア人があまりに少ないのです」

さらにケニアではごみのポイ捨てが多く、「人々の環境に対する意識はまだまだ低い」という。特に、モンバサのような大都市では海辺に大量のごみが放置され、そこから流れ出る物質が海を汚染する。

青年海外協力隊
Kikuchi Kei

菊池 佳さん



青年海外協力隊
Iida Manami

飯田 愛実さん



潮騒に包まれ、 満天の星の下で暮らす喜び

「ここは世界有数のサンゴ礁や海洋生物が生きる貴重な海だ！」と素晴らしい自然が危機にさらされる前に、その事実を未来をつくる子どもたちに知らせること。それが、菊池さんの活動の最大のテーマだ。

今、菊池さんは週に5〜6回のペースでモンバサ近郊の学校を巡回し、海と自然に関する授業を行っている。その教材として使っているのが冒頭に紹介した映像だ。そして、時にはビーチに出て、ガラス張りになったボートの底から美しい海を子どもたちに見てもらう。

赴任してから2年。これまでに接してきた子どもたちは延べ2000人。学校に行くと、「ケイ、ケイ」と言って迎えてくれる。それがやりがいでもあり、喜びだ。子どもたちが自然の大切さに目を向け始めている…。菊池さんが、そう確信する時でもある。

もう一人、ケニアの海に魅せられた青年海外協力隊員がいる。09年8月に赴任した飯田愛実さんだ。モンバサよりさらに南部の町・シモニの沖合にあるキシテ・ムブンゲティ海洋公園を管理する、ケニア野生生物公社(KWS)の一員として活動する。

着任早々、飯田さんは驚かされた。環境教育のスタッフがいない。担当部署もない。その上、共に活動するはずだったスタッフは3年間の学業休暇に入ってしまった。小中学校への巡回授業は停止したまま。つまり、環境教育を「新人」の飯田さんが音頭を取り、ほかのスタッフを巻き込みながら行うことになったのだ。アフリカの地を初めて踏んだ飯田さん。動揺し、不安を感じたことは容易に

想像できる。

そんな飯田さんを支えてくれたのはやっぱり現地の人々だった。同僚には、地元詳しいシモニ出身者がいる。海洋公園勤務のベテランや、日本でJICAの環境教育研修に参加した人たちもいる。こうした同僚の協力を得て、飯田さんは1月から、近隣小学校5校への巡回授業を開始した。内容は、KWSや海洋公園の役割、今回テーマとしたサンゴの大切さをビデオやクイズ形式で紹介する90分のプログラムだ。また、飯田さんは教材を作るために海に潜り、魚やサンゴを撮影する。地元のコミュニティグループと環境保全について話し合ったり、時にはKWSの同僚にパソコン操作を教えたりもする。「シモニの人たちはとてもフレンドリーで、良き話し相手になってくれます」。

そして、彼女を支えるもう一つが、自然の美しさだ。

「シモニは静かで穏やかな漁村です。道端に放置されたごみは気になります。が、空気はきれいで、潮風と磯の香りが心を洗ってくれます。夜には潮騒を聞きながら満天の星空が堪能できます。私は今、素晴らしい環境の中で暮らしています。でも…、時々思うんです。ここに住む人々はこの素晴らしいさに気付いているんだろうか」

キシテ・ムブンゲティ海洋公園までは、シモニから船で1時間弱。移動中、8割もの確率でイルカに出会えるという海の楽園だ。こうしたかけがえのない海を次代に残していくために、菊池さんと飯田さんは満天の星空の下で新たな意欲に燃えている。



ケニアの自然は海だけではない。菊池さんは植林活動のほか、落ち葉や豆炭などを利用した肥料づくりなどを通じて、4R[リデュース(減量)・リユース(再使用)・リサイクル(再資源化)・リフューズ(購入拒否)]の重要性も伝えている

きくち・けい

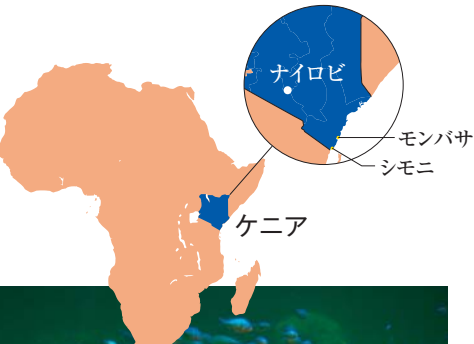
1985年北海道出身。ニュージーランドのウェリントン・ビクトリア大学(開発学・環境学専攻)を卒業後、青年海外協力隊に。2008年3月よりケニアへ。



巡回授業で小学生にサンゴについて話す飯田さん。終了後には児童や先生にアンケートを取り、次のプログラム作りの参考にしている

いいだ・まなみ

1970年長野県出身。筑波大学大学院ビジネス科学研究科修士課程修了。気象情報会社、外資系証券会社、銀行などを経て2009年8月よりケニアへ。



手付かずの大自然が残るケニアの海(上)が今、大量のごみにより汚染されつつある。海の美しさ、大切さを地元の子どもたちに知ってもらおうと2人は清掃活動を実施

「ケニアの子どもたちに、 身近な海の素晴らしさを伝えたい」

ケニアには美しい海がある。

だが地元の人々の多くは、ビーチなどにゴミをポイ捨てし、その価値に気付いていない。

そんな大自然の大切さを伝えようと、環境教育に励む青年海外協力隊員たちがいる。

第15回

ゲンバの風



(上) 試合前には、HIV／エイズの予防を訴える劇が行われた
(下) イベントには、ガーナで活動する青年海外協力隊員も手助けに駆け付けた



「でも、ただ試合を見せるだけでなく、現地の人々や地域に貢献できるようにすることを併せて実施したかった」と言う中西さん。そこで、アフリカに知見があり、同社の趣旨に賛同力を貸してくれるパートナーとして、JICAと連携することに。若者を中心にHIV／エイズの感染が拡大しているガーナで、ラジオ放送や演劇を通じて予防・啓発活動を行う、JICAの「マスメディアを通じたエイズ教育プロジェクト」との共同プロジェクトが実現した。

イベントでは、試合の前後やハーフタイムにHIV／エイズの予防に関する啓発ビデオが流され、現地のNGOによる劇やクイズなども行われた。サッカー観戦で集客力を高め、人々に夢と感動を伝えながら、HIV／エイズについての知識も広める。それがこの企画の狙いだ。イベントは、10日間でガーナ国内の7つの地域を巡回し、予想をはるかに超える延べ9000人近くが参加。多くの人々にHIV検査の受診を促す

その考え方は、同社のボランティア休暇制度にも表れている。この制度で、すでに30人以上の社員が青年海外協力隊として活動してきた。彼らは国際協力の現場で2年間の貴重な経験を積み、一回り大きくなって職場に復帰する。

ソニーでは今回の経験を生かし、6月からのFIFAワールドカップ南アフリカ大会開催中にも、JICAや国連開発計画(UNDP)とともにガーナとカメルーンで同様のイベントを開く予定だ。また、子どもたち1万5000人をスタジアムへ招待し、現地NGOとの協働でHIV／エイズの啓発活動も行う。これらを後押ししようと、全世界の社員による募金活動も始まっている。

「ミレニアム開発目標に掲げられたHIV／エイズなどの問題はグローバルに広がっており、特に途上国では深刻です。多国籍企業でもあるソニーが、そうした問題に無関心であってはならないのです」

富田さんの言葉は、独自の技術と豊富な人材を、明るく平和な未来づくりに提供していきたいという、ソニーの熱い意気込みを物語っている。



(上) パブリック・ビューイングの野外会場で、機材の調整をするソニーのスタッフ
(下) ガーナ代表が出場する試合を、食い入るように見つめる

など、地元にとっても、ソニーやJICAにとっても、「win-win-win」となる大きな成果を手にした。

世界に向けられた
ソニーのまなざし

PLAYERS 国際協力の担い手たち

ソニー株式会社

"JICA and Sony For the Next Generation in Ghana 2009"と名付けられた今回のイベント。現地NGOとの協力のもと、開催前には宣伝パレードが実施された



HIV／エイズを予防し、 サッカーで夢と希望を

世界を舞台にビジネスを展開するソニー。
グローバルな視点で、社会貢献活動にも積極的に取り組む。
ガーナで実施されたサッカーのパブリック・ビューイングもその一つだ。

夢と健康の「コラボレーション」

野外の広場に集まるたくさんの人々。最前列に陣取った子どもたちが、200インチの大型スクリーンを食い入るように見つめている。上映されている映像は、白熱するサッカーの試合※。有名選手の表情がアップになるたび、大きな歓声が上がっている。2009年6月から7月にかけて、ソニー株式会社がJICAと手を組んでガーナで実施した、パブリック・ビューイングでのひとコマだ。

「選手の名前を知っている、顔を見るのは初めてという子も多いんです。ものすごい熱狂ぶりでした」。そう話すのは、イベントの発案者の一人、ソニー・クリエティブセンターの中西吉洋さんだ。ガーナのテレビ普及率はわずか21%。それも都市部に集中している。地方では、ナショナルチームの試合があってもほとんどの人が観戦できない。「屋外でも使えるプロジェクターや大型映像装置、音響機器などソニーの機材と技術を使って、アフリカの人たちにサッカーの感動を伝えたい」。イベントは、彼らのそんな願いが原点となった。



ソニーでは、サッカーを通じて社会貢献を行う国際NGOと協働。自社製品を提供し、ワールドカップの開催に向け、子どもたちのための写真や映像制作のワークショップを世界各地で実施する © Dana Rösiger

マラウイへの支援が始まったころを知る生徒はすでに卒業し、今はその思いを受け継いだ後輩たちが店の運営に携わる。「マラウイは遠いけど、いつか必ず行ってみたい!」と目を輝かせる



吉商本舗の店内で売られているブレスレット



色鮮やかなブレスレットは特に人気が高い。こうした吉商本舗の活動は、開発教育(国際理解教育)の優れた実践事例として、外務省主催の「グローバル教育コンクール2009」で外務大臣賞を受賞した

小さな お店が届ける 大きな真心



富士市立吉原商業高校の生徒たちが部活動の一環で運営している「吉商本舗」。マラウイの子どもたちが作るブレスレットの販売を通じて、貧困やHIV／エイズに苦しむ現地の子どもたちや人々に、大きな力を与えている。

エイズ遺児を助ける 手作りブレスレット

「いらつしゃいませー」
懐かしい駄菓子やドリンク、小物類が並ぶ店内に入ると、レジ係の高校生たちが元気に迎えてくれた。静岡県富士市、吉原商店街の一角。富士市立吉原商業高校・商業ビジネス部が、商店街の活性化に努める地元NGOと手を組んで運営する「吉商本舗」がここにある。生徒たちの商業教育の場として、また、若者のアイデアを積極的に取り入れる富士市の地域活性化支援策の一つとして、2004年に開店した。

店内では、カラフルなビーズででき

たマラウイ製のブレスレットがひときわ目を引く。吉商本舗では06年から、現地の子どもたちが作るこれらの製品をフェアトレード商品として販売し、その売り上げで貧困やHIV／エイズに苦しむ子どもたちや地域住民の支援を行っている。

きっかけは、顧問の若園耕平先生が06年夏に参加したJICA中部の「教師海外研修」。研修先マラウイの地方の村ルウェレジで目にしたのは、深刻化するHIV／エイズ問題の現実だった。「親をエイズで亡くし、貧困で学校をやめなくてはならない子どもたちがたくさんいました」。

「何か私たちにできることはないの

か」。そう考えていた矢先に出会ったのが、当時、ルウェレジでエイズ予防の啓発活動を行っていた青年海外協力隊の尾崎瞳さんだ。尾崎さんは活動の一環で子どもたちと手作りのブレスレットを製作・販売し、その利益をエイズ遺児の学費や生活費に充てていた。「これを吉商本舗でも販売し、売り上げでマラウイの子どもたちを支援できないか」。帰国後、店舗会議で相談したところ、「先生、やりましょう!」と生徒たちの力強い声が上がった。

すぐに、吉商本舗では現地から送られてきたブレスレットの販売が始まった。原価分はエイズ遺児たちの授業料や生活費に、利益分は住民がHIV／エイズの検査やカウンセリングを無料で受けられる検査センターの建設資金として積み立てられることになった。

店舗だけでなく、学校の文化祭や地域イベントでの出店、ボスターの作成など、アイデアを出し合いながら積極的に行動した生徒たち。その成果もあり、ブレスレットは順調に売り上げを伸ばした。また、「検査センターの建設に役立ててほしい」と、若園先生と教師海外研修で一緒だった他校の先生とそのクラスの子が、アルミ缶

検査センターは 両国の友情の証し

のリサイクルで得たお金を寄付してくれた。趣旨に賛同した地元の人々からも多くの支援金が寄せられた。半年後には検査センターを建てるのに十分な資金が集まり、早速、現地では尾崎さんのリードのもとで建設がスタート。「無事に完成した」とのうれしい知らせが吉商本舗に届いたのは、若園先生の訪問からわずか10カ月足らず、07年6月のことだった。

完成を受け、吉商本舗とJICAマラウイ事務所がテレビ会議システムで結ばれ、記念式典が行われた。現地の中学生たちからは感謝の言葉が伝えられ、生徒たちもメッセージを送った。「私たちだけでなく、支援をしてくれた多くの日本の人々がこの日を楽し

みにしていました。検査センターは、両国の友情の証しです」
最後には、全員で練習してきたマラウイ国歌を歌った吉商本舗の生徒たち。画面の向こうで、マラウイの中学生たちが胸に手を当て、一緒に口ずさんでいるのが見えた。彼らの心が一つになった瞬間だった。
こうした吉商本舗の活動は、その後も大きな反響を呼んでいる。「文化祭で販売したい」と、他校からブレスレットの提供依頼を受けることもある。売り上げは引き続き、ルウェレジのエイズ遺児支援と検査センターの運営・維持に使われている。特に検査センターは、それまで遠くの病院へ行かなくてはならなかった住民の負担を劇的に減らし、HIVの感染予防や早期発見に大きく貢献している。また、抗レトロウイルス薬※の処方・配布も行える



検査センターでは、一日平均20人前後が検査やカウンセリングに訪れる。最近、遠くに住む人々のための訪問サービスも行っている



ルウェレジで、中学生たちにエイズ予防の大切さを伝える青年海外協力隊の尾崎瞳さん

ようになるなど、今では地域のエイズ対策の拠点として不可欠となった。
「買い物をしてくれるお客さんの温かい真心が、このお店を通じてマラウイに届いているということ。それが喜びとなっています」と話すのは、部長の桐部美咲さん。09年からは新製品として、フェアトレードで仕入れたマラウイ産紅茶を使ったキャンディーの販売も始めた。商店街の小さなお店から生まれる高校生たちの行動力、熱意が海を越え、今日もマラウイに大きな力を送り続けている。

教師海外研修でルウェレジの中学生たちと交流する若園先生



※HIVの増殖を抑え、エイズ発症を遅らせる効果を持つ。



NPO法人
環境修復保全機構

いわば、＼気付きのプロジェクト＼

NPO法人環境修復保全機構の石山千佳さんたちは、カンボジアの小学校で、不思議な光景を目撃した。

「貧しい身なりをした子どもたちが窓の外にたくさん集まって教室の中をのぞいているんです。この子たちはどうしたのだろう？なぜ中に入らないのだろう？その数の多さに私たちは驚かされました」

聞いてみると、彼らは授業料を払えず、学校に通えない子どもたちだという。だから、教室に入れない。学校にあるトイレも借りられない。

「ショックだったのは、そんな子どもたちを先生たちはあえて気にする風もなく授業を進めていることでした。その現状に先生自らが対処できないことに疑問を感じ、解決に向けて先生たちが立ち上がるきっかけ作りができないかと思いました」環境修復保全機構は、有機農法の普及な

なのか、地域の人々自らが考え、自分たちの問題として気付いてもらおうというプロジェクトなのです」

学校菜園を地域のために上手に使う

プロジェクトは、地域の問題を話し合うワークショップの開催から始まった。＼集まった＼のは、小学校の先生たちだ。その数は延べ60人に上る。

1975年から4年間続いた波尔・ポト政権の時代に教育者は虐殺の対象とされた。現在、教育現場に立っている先生のほとんどが経験不足だ。しかも、学校間の連携はほとんどない。だから、＼集まった＼先生たちが地域の状況について話し合う



(上)外から教室の中をのぞき込むのは学校へ通えない子どもたち。その数の多さに環境修復保全機構のスタッフは衝撃を受けた
(下)環境保全に関する絵画コンテストも実施された

立ち上がる カンボジアの先生たち

NPO法人環境修復保全機構による
ユニークなプロジェクトがカンボジアで進行中だ。

小学校の先生から地域が抱える問題の解決策を募るというもの。条件は一つ。学校菜園を利用したアイデアだ。



小学校の菜園。有機農法で空芯菜やキャベツなどの野菜が栽培されている

のは、カンボジアではとても画期的なことなのだ。

「話してみると、先生たちは意外と子どもたちの家庭の事情に精通していることが分かります。学校に行けない子の存在やその子たちの事情についても把握しています。しかし、積極的に解決しようとする意欲は少なく、外部からの援助に頼り、自分が地域でできることはないか、なかなか

考えようとしません」。ワークショップに立ち会った石山さんの感想だ。

プロジェクトは、問題解決のためのアイデアを先生たちが自ら企画立案すること促している。学校菜園を使った環境教育プログラムを募り、優秀プログラムを表彰。その実施をサポートしているのだ。

すでに、ワークショップでこんなアイデアを語る先生もいる。小学生が村人から農作業を教わり、逆に小学生は村にまだ多く存在する読み書きのできない人に文字を教える。結果、菜園が貴重なコミュニケーションの場となる。

さらに、学校で有機農法を学んだわが子から刺激を受け、堆肥づくりや防虫液づくりに挑戦する親が現れてくるなど、子から親への情報の流れも徐々に出てきている。これから、学校菜園を舞台にしたさらに多彩なアイデアが出てくるはず。その中には、地元を根を下ろした先生だからこそ考えられるアイデアもあるだろう。最終的にはすべてのアイデアが「地域問題の解決に向けたプログラム集」としてまとめられ、現地の人々が主体となって問題解決に当たろうとする際の指南書となるはずだ。JICA基金は、この一連の流れの運営



「地域問題検討ワークショップ」に参加した小学校の先生たち。時間の経過とともに、活発な議論が交わされるようになった

環境修復保全機構の活動の様子や団体の詳細はホームページでご覧になれます。
<http://www.erecon.jp/>

どにより環境と開発の調和を目指すNGOだ。「環境保全に関する普及活動を進めていく中で、地域の抱えるさまざまな問題と直面します。私たちは以前からそうした問題に、地域住民とともに取り組む必要性を感じていました。窓の外の子どもたちは、そのきっかけをくれたのです」。

石山さんたちは2009年、カンボジアの首都プノンペンとコンボンチャム州の複数の小学校で新たな事業を始める。学校菜園を利用しながら子どもたちの置かれた環境や地域の抱える問題を改善していくというプロジェクトだ。学校菜園は、同機構が小学校と協力して作り上げてきたもの。環境と調和した有機農法を、将来の農業の担い手である小学生に伝えるのが目的だ。

東京農業大学で教えるながら同機構の代表理事を務める三原真智人さんが語る。

「この事業は、何か形あるものを地域に提供するものではありません。今、何が問題

費、特に優秀プログラムの実施費用に充てられる予定だ。

環境修復保全機構は、三原さんと事務局長の上野貴司さんによつて2000年に設立された。タイを主なフィールドとして調査研究を行っていた三原さんたちの設立当時の思いはこうだ。

「研究の成果を学術論文にまとめ、学会で発表する。これだけでは自分たちのために途上国を利用しているだけではないか。研究で得た成果をなんとか現地にフィードバックしたい」

その思いが有機農法を軸とする環境教育につながった。今、その思いはさらに深化し、環境修復保全機構の活動は幅を広げている。そして、地域の先生たちのココロを触発している。



あなたの小さな一歩から始まる国際協力 世界の人びとのためのJICA基金

JICAでは、国際協力に関心のある日本の皆さまからの寄付を、開発途上国の貧困削減や環境保全への取り組みに活用する「世界の人びとのためのJICA基金」で受け付けています。皆さまのご支援をお待ちしております。

寄付金の使われ方

お寄せいただいた寄付金は、途上国の貧困削減、医療や教育の提供、環境問題の解決などに取り組むNGOの活動に充てられます。各支援活動や寄付金事業収支についてのご報告は、「JICA寄付サイト」で公表します。

寄付の方法

「JICA寄付サイト」からお申し込み下さい。クレジットカードによる決済や、銀行・郵便振込みなどがお使いいただけます。
JICA寄付サイトURL: <http://www.kifu.jica.go.jp/>

Q

アフリカではどれくらい おコメが食べられているの?

日本人にとって、毎日の食事に欠かせないおコメ。海を越えて、はるか遠いアフリカの国々でも、主食として食されているのをご存じだろうか?最近のアフリカのコメ事情とJICAのアフリカ稲作支援について聞いた。



(上) ベナンの試験圃場で稲の生育について説明をする惣慶嘉専門家

(左) セネガルの代表料理「チェブジェン」(撮影: 今村健志朗)

JICA農村開発部
乾燥畑作地帯第二課

徳田 進平

PROFILE

1999年JICAに就職。大阪国際センター、アフリカ部、モロッコ事務所を経て、2007年9月より現職。



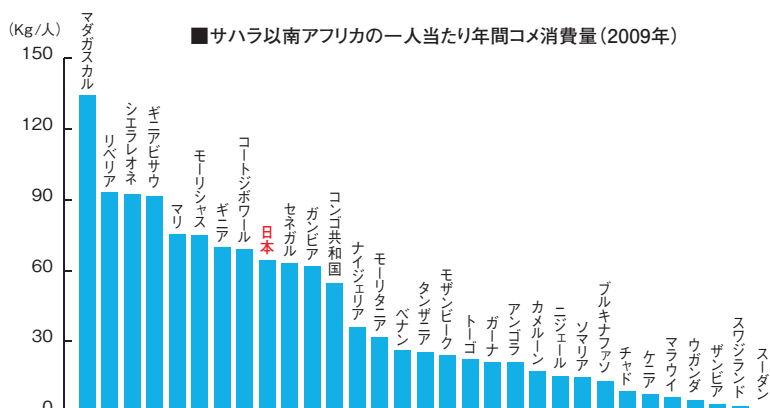
「アフリカのコメ生産倍増を目指し、 包括的な支援を行っています」

A コメというと、日本はもちろん、アジアで多く食べられているイメージがありますが、実はアフリカでもコメを主食とする国がたくさんあります。一人当たりのコメ消費量で見ると、マダガスカル、シエラレオネ、マリ、ギニア、コートジボワールなどは、日本より高い数値を記録しています。

中でもマダガスカルは、アフリカのみならず、世界で見ても有数のコメの消費国であり(一人当たりコメ消費量135キロ)、自給率も90%に達しています。10〜12世紀ごろ、インドネシア系の人々などによって島に稲作がもたらされ、その後16世紀までにはほぼ全土に普及されたといわれています。

地域別で見ると、西アフリカでは、コメを食べる習慣が古くから定着していました。特に、セネガルの代表的料理「チェブジェン」というトマト味の炊き込みごはんは有名です。一方、東アフリカでは、トウモロコシ、ジャガイモ、キャッサバなど、主食は実にバラエティーに富んでいます。近年は都市化に伴い、コメの消費量が急増してきています。

このような中、アフリカ全土ではコメの需要と供給のバランスが崩れ、増加する需要に供給が追いついていない状況です。現在アフリカの1ヘクタール当たりの収量はアジアのわずか半分。圃場の均平化や正条植え、除草など、コメの栽培管理技術を工夫すれば、生産拡大の可能性は十分にあると考えられます。



そこでJICAがかじを取り、2008年5月の第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)で発表されたのが「アフリカ稲作振興のための共同体(CARD)」イニシアチブ。JICAを含む11の援助機関が連携し、今後10年間で、サハラ以南アフリカのコメ生産量の倍増(1400万トンから2800万トン)を最終目標に、包括的な支援を行っていくというものです。

昨今の食料価格の高騰で、アフリカの貧困層はより厳しい生活を強いられています。CARDの取り組みは、食料を取り巻くさまざまな問題の解決につながると信じています。

01 JICA国際緊急援助隊 ハイチで医療活動

1月13日午前6時53分（日本時間）、カリブ海に浮かぶ国、ハイチの首都ポルトープランス郊外約15キロの地点で、マグニチュード7.0の大地震が発生しました。これを受けJICAは翌14日、医療チームの派遣を念頭に緊急調査チームを派遣。現地のニーズ調査や活動場所の選定など

を行い、16日夜、医師、看護師、外務省、JICAなどから成る総勢25人のチームが成田を出発しました。17日には首都の南西40キロの地点にある都市レオガンの看護学校に到着、18日朝から活動を開始しました。診療テントには緊急を要する重傷者が多く訪

れたため、他国チームとも協力しながら診療が行われました。また、現地の看護学生がクレオール語とフランス語の通訳として協力してくるなど、被災地の人々の助けが隊員たちにとって大きな励みとなりました。

また活動中、2004年のスマトラ沖大地震・インド洋津波災害時の日本の支援の恩返しがしたいと、スリランカPKO部隊が懸命に警護を行ってくれました。医療チームは8日間の活動で延べ534人を診察。自衛隊部隊に活動を引き継ぎました。使用した資機材は活動先の看護学校に供与され、現在も被災者の治療に役立てられています。



男性の腹部の検査をする隊員



耳の中に異物が入った男の子を診断

02 公開セミナー 「BOPビジネスの可能性とJICAとの連携」開催

1月19日、公開セミナー「BOPビジネスの可能性とJICAとの連携」が国連大学（東京・渋谷区）で開催されました。

このセミナーは、開発途上国の主に貧困層を対象にビジネスを展開し、現地の人々の生活改善をもたらす「BOPビジネス」とJICAの連携の可能性について紹介するもの。冒頭の基調講演では、アライアンスフォーラム財団代表理事・原文丈人さんが、同財団のバングラデシュ、ザンビアの事業を事例に、BOPビジネスが途上

国の貧困削減にもたらす役割について講演。続いて、高野剛・JICA民間連携室参事役が2010年度にスタートする「BOPビジネスとJICAの連携・促進制度」の骨子案について発表しました。最後に、日本総合研究所主席研究員の足達英一郎さんがファシリテーターとなって行われたパネルディスカッションでは、「BOPビジネスの成功は、現地の視点を十分重視して初めて期待できるもの」という意見が共有されました。

03 JICA九州共催シンポジウム 「アジアの低炭素社会の構築に向けて」開催

2月12日、リーガロイヤル小倉（福岡県北九州市）で、環境シンポジウム「アジアの低炭素社会の構築に向けて」（北九州市、読売新聞西部本社、JICA九州共催）が開催されました。

当日は、中国、インド、インドネシア、ラオス、マレーシア、シンガポールでJICAの環境プロジェクトに携わる関係者が来日し、日本の技術や経験を生かした環境分野の国際協力とアジアの低炭素社会の可能性について、日本の専門家らと熱い議論を交わしました。

また、各国で実践されている産官学十市



会場には北九州市民など144人が参加

民による取り組みが紹介され、低炭素社会の実現に向けて、両者のパートナーシップ構築の重要性が強調されました。

イ チ オ シ !

BOOK

『世界を変える! みんなの力 Me to We』

著者のクレイグは世界の児童労働の実態を知った12歳の時、「子どもの権利を守るために行動したい」と友人に呼び掛け、子ども主体の国際協力団体フリー・ザ・チルドレンを立ち上げた。誰かのためにした小さなことが、人を変え、社会を変え、世界を変えていくことを身をもって体験してきたクレイグと仲間たちが、MeではなくWeを考えて行動することを訴える。各章の「マイ・ストーリー」では、俳優のリチャード・ギアやノーベル平和賞受賞者のデズモンド・ツツ大主教などが、それぞれの“Me to We”を語っている。



クレイグ・キールバーガー／
マーク・キールバーガー 著
佐光紀子 訳
柏書房
1,995円(税込)

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

BOOK

『南アフリカの衝撃』

年間2万人が殺人事件の犠牲になっている南アフリカ共和国。間近に迫るサッカーワールドカップで注目の集まる国だが、その素顔はあまり知られていない。南アフリカはアフリカ最大の経済力でグローバル化を突き進む一方、多発する凶悪犯罪、異常に高い失業率、世界最高水準の所得格差など、さまざまな矛盾と危険を抱えている。本書はアフリカ研究の第一人者が、この国の経済・政治から歴史までを、自らの体験を交えながらまとめた一冊。



平野克己 著
日本経済新聞出版社
893円(税込)

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

EVENT

“世界を知る” JICAのイベント

<東京>

●セミナー 第1回「アジアの人身取引を考える」

人間の安全保障展「世界の幸せと悲しみ」(5月30日正午まで)に合わせて開催。

日時: 3月12日(金) 18時30分～20時(要申込)

会場: JICA地球ひろば(東京都渋谷区)

講師: 田中由美子(JICA国際協力専門員)ほか

問・申込: JICA地球ひろば 地球案内デスク

TEL: 0120-767278

●青年海外協力隊

平成22年度春募集 キックオフイベント

国連児童基金(UNICEF)親善大使の黒柳徹子さんによる講演、協力隊OB/OGによる活動経験談など。定員500人。

日時: 3月27日(土) 14時～17時15分(要申込)

会場: 早稲田大学 国際会議場 井深大記念ホール

応募締切・方法: 3月14日(日)必着・はがき、FAX、ウェブのいずれか

応募先: 〒104-8665 東京・京橋支店私書箱303号

朝日新聞東京本社広告局「国際協カトークイベント」係

FAX: 03-5972-6634 URL: <http://www.asahi.com/e-post/>

<名古屋>

●世界と出会う絵本ひろば“Looppe ルプブ”おはなし会

各国の絵本の読み聞かせを通して世界とつながるイベント。なごや地球ひろばサポーターでタレントの原田さとみさんら主催。毎月第4土曜日開催。

日時: 3月27日(土)・4月24日(土) 14時～16時

会場: なごや地球ひろば(愛知県名古屋市)

問: なごや地球ひろば 市民参加協力推進課

TEL: 052-533-0121

VD

『インビクタス／負けざる者たち』

アパルトヘイト(人種隔離政策)を撤廃へと導き、1994年に初の黒人大統領となった南アフリカ共和国のネルソン・マンデラ。その彼が、人種差別が残るこの国を一つにまとめるために必要だと考えたのが、翌95年のラグビー・ワールドカップ南アフリカ大会での優勝。白人のチームキャプテンとともにナショナルチームの再建を図る。やがて大統領とキャプテンの間に人種を超えた友情が芽生え、初出場となった白人黒人混合の南アフリカチームは快進撃を続けていく。ジョン・カーリンの原作のノンフィクション小説『Playing the Enemy』を、クリント・イーストウッドが映画化。主役の2人を、オスカー俳優モーガン・フリーマンとマット・デイモンが演じる。



© 2009 WARNER BROS. ENTERTAINMENT INC.

2009年／アメリカ／134分

監督: クリント・イーストウッド

出演: モーガン・フリーマン、マット・デイモン

公開: 全国公開中

URL: <http://www.warnerbros.co.jp/invictus/>

Mali

【マリ】

文・写真＝飯塚 明夫 (写真家)

生きて
いる
仮面
――仮面が導く魂の再生の物語――

喪明けの儀礼ダマに登場した
仮面。近くに住む遊牧民フラニ
の女性を表している



E.故人をしのんで広場を練り歩く村人たち(埋葬儀礼)
 F.深夜になってもたいまつを手に踊りは続く(埋葬儀礼)
 G.髪飾りを着けて踊る女性たち。死に深くかわる仮面を、子どもを産む役割のある女性が着けることはできない。髪飾りが仮面の代わりになる(喪明けの儀礼ダマ)



G



「私たちは遠い土地からバンジャガラにやって来た」と村の長老ジョン・グノは言う。

8世紀ごろ、サハラ砂漠縦断交易によりイスラム教が西アフリカにもたらされた。その後、勢力を増すイスラム教から自分たちの信仰を守るため、ドゴンの人々は故郷マンデ（マリの首都バマコの西方地域）を後にした。長い旅の末にたどり着いたのが、このバンジャガラ断崖地だった。

乾期の終わる4月ごろ、仮面の登場する二つの儀礼が行われる。「埋葬儀礼」と「喪明けの儀礼ダマ」である。

村の内部は家が密集し、その間を細い道が迷路のように続く。泥造りの家は柔らかな曲線で構成され、手作りの温もりが残る。神話に登場する神や精霊を祭った神殿や祭壇がそこかしこに存在する。ここは神話の世界が生きる村である。

私は儀礼の行われるオゴル村を案内してもらった。村全体が大きな岩地の上に造られているのは、限られた平地をできるだけ畑に利用するためだ。ドゴンの人々は少ない雨と井戸水、ため池を頼りに細々と農耕を営んでいる。現金収入を得る仕事が村には少なく、街や隣国に出稼ぎに行く男たちも多いという。

マリ中央部のバンジャガラ断崖地は、高低差500メートルほどの断崖が百数十キロ続く、岩と砂とバオバブの巨木に囲まれた乾いた褐色の世界だ。ここに哲学的ともいえる壮大な創世神話と神秘的な宗教儀礼で知られたドゴンの人々が住む。特に仮面の儀礼は、「死者の魂の再生」のために重要である。



A

A.村に向かう仮面の集団。不用意に仮面に近づくことは禁じられている(喪明けの儀礼ダマ)
 B.屋根に上り埋葬儀礼の始まりを告げる長老と鉄砲を撃つ村人(埋葬儀礼)
 C.仮面の踊りを見る村人たち。岩の上に家が見える(喪明けの儀礼ダマ)
 D.魂の旅立ちを促すために故人の家の屋根で激しく踊る仮面たち(喪明けの儀礼ダマ)



D



L



M



N

「大仮面（イムナ・ダヌ）」が村に現れ、漂う故人の魂をその仮面に取り込み村の外に連れ去る。翌日仮面が登場し、死者に敬意を表し、その魂を慰めるために踊りを披露する。しかし埋葬儀礼の後も故人の魂はまだこの世にとどまっている。

埋葬儀礼から数年後に「喪明けの儀礼ダマ」が行われる。ダマを行うには多額の費用が掛かるため、遺族は喪に服しながら資金を貯める。ダマの儀礼では、仮面は故人の家や村の広場などで心を込めて激しく踊る。踊りに満足し精霊の世界に旅立った魂は、やがて村に戻り新たな生命（赤ん坊）の中に入り再生するという。

死者が出て混乱した村社会の秩序を取り戻すことも、仮面の重要な役目だと長老たちは語る。多種多様な仮面は、精霊や祖先、職人、奴隷商人、近隣に住む他部族や動物などを表している。仮面がそのキャラクターを演じ踊るところを見て、村人たちも自分の役割を再認識し、秩序ある日常生活に戻っていく。

仮面は、魂の再生を導き、村の秩序を保つ存在として、今もドゴンの人々の中で「生きている」のである。

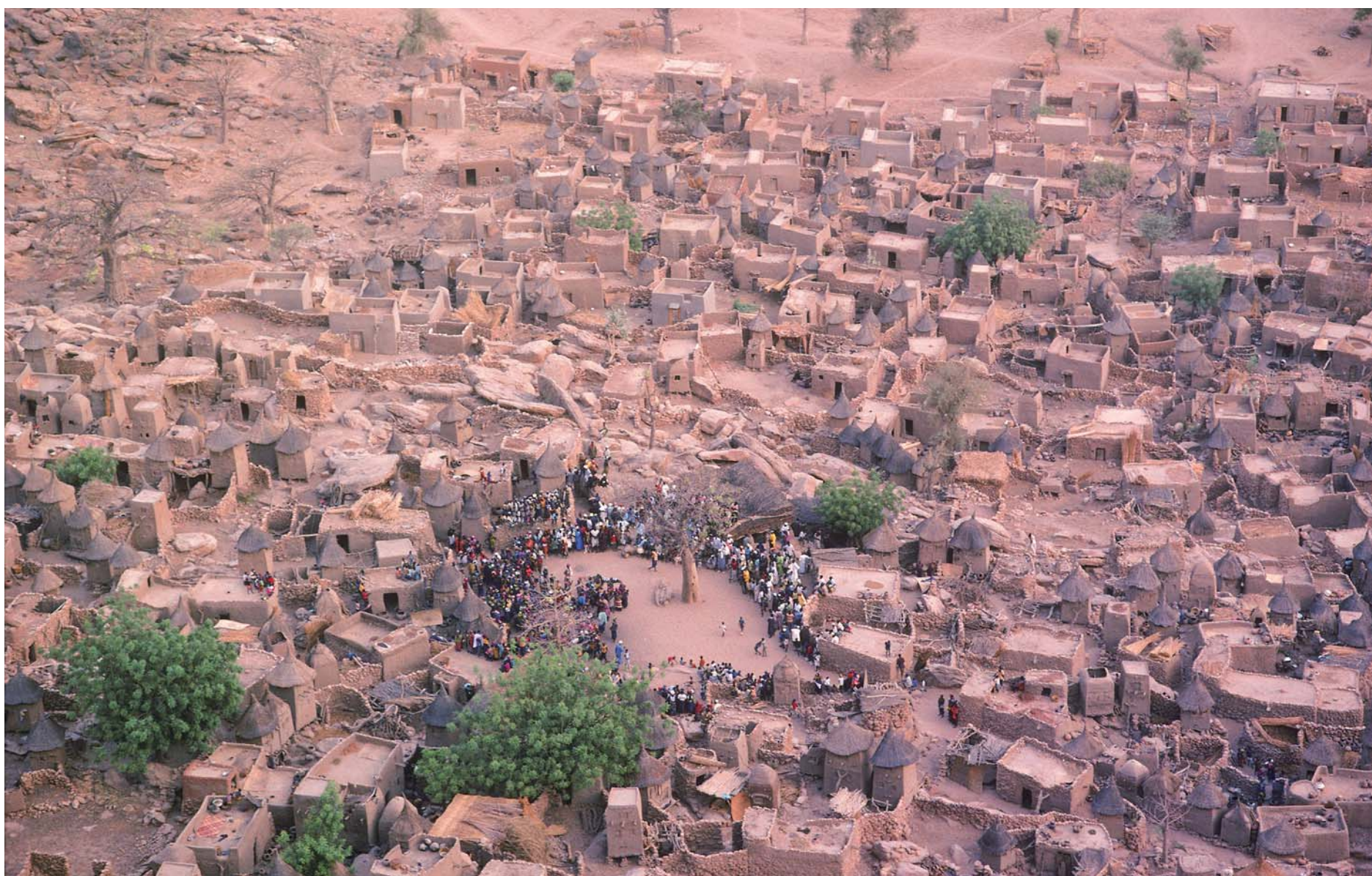
K.バンジャガラ断崖の下に広がるドゴンの村。広場には聖なるバオバブが見える
L.市場から家に帰る女性とバオバブの木
M.ヒエの畑と子どもたち。穀物が順調に育つには雨の量と降る間隔が大切
N.5日ごとに開かれる市場。近隣の5つの集落が持ち回りで開く

埋葬儀礼（合同葬儀）の目的は、死者を弔い、死者の肉体から離脱した魂をなだめることにある。夜には、ドゴンの最初の死者の魂が宿



H.占い師。夜に現れるキツネの足跡の場所を見て占う
I.家の入り口にある扉は、神話の世界の再現である
J.豊稔の祭りのためペイントされたビヌの神殿。ドゴンの祖先を祭る大切な神殿

H



K



学校運営委員会の提案で始められた補習授業に参加する子どもたち



3つの橋梁のうち、最初に完成しつつあるバレ橋

JICAの活動

in マリ

経済成長の恩恵をすべての人々に

順調な経済成長にもかかわらず、マリでは貧困率の削減が停滞している。そこでJICAは、すべての国民にその恩恵が行き渡るよう、教育、水、保健、農業、インフラ整備など、幅広い分野で支援を行っている。

西アフリカでも内政が比較的安定しており、近年の経済成長率は5%前後と、順調な成長を続けているマリ。しかし同時に、人口の増加が著しく、成長の恩恵を受けているのはほんの一握りの人々に過ぎない。国民の大多数は農業・牧畜に従事しているが、生産量が自然環境に左右されやすく、安定した収入源に至っていないのが現状だ。また、金と綿花はアフリカ域内でも有数の輸出量を誇るものの、国の産業がこれらに大きく依存しているため、経済基盤は極めて脆弱となっている。

そうした状況を受けてJICAでは、教育・水・保健サービスといった基礎生活の向上や、道路などの地域インフラ

の整備、農村開発を中心に、マリの貧困削減に向けた幅広い協力を行っている。

教育分野では、2008年よりニジェール川に面するクリコ州で「学校運営委員会支援プロジェクト」を実施中。マリでは初等教育の純就学率が63%（2007年）であり、サハラ以南アフリカの平均を下回っている。プロジェクトでは、各学校に設置されている「学校運営委員会」の機能向上を通じて地域住民の学校運営への参加促進を図っており、初等教育へのアクセスと質の改善が少しずつ見え始めている。

一方、インフラ分野では、無償資金協力により「南回廊整備事業」が進められている。建設中の3つの橋梁（バ

レ橋・バフィン橋・ファレメ橋）が完成すれば、隣国セネガルと一本の国際幹線道路（南回廊）でつながる。それにより、両国間のヒト・モノの行き来がスムーズになり、経済活性化や周辺住民の社会サービスへのアクセスの向上などが期待できる。

また2010年秋には、土壌肥料、植林、パソコンインストラクターなどの分野で、同国初となる青年海外協力隊の派遣が予定されている。

■JICAの協力実績（人数ベース） 2009年3月31日現在

	2008年	累計
研修員受入	58人	434人
専門家派遣	9人	20人

マリにJICA事務所はないが、セネガル事務所が兼轄

世界遺産都市
ジェネの旧市街には
泥で造られた
巨大モスクがそびえ立つ。



音楽や踊りが盛ん。
グリオと呼ばれる世襲制の
音楽家系は楽器を演奏する
特権がある。



首都：バマコ
面積：124万km²（日本の約3.3倍）
人口：1,270万人（2008年）
公用語：フランス語
宗教：イスラム教80%、伝統的宗教、キリスト教
1人当たり国民総所得（GNI）：500ドル（2007年）
経路：日本からの直行便はなく、パリ経由が一般的なルート。
通貨：CFAフラン 655.957CFAフラン＝1ユーロ（固定レート）
気候：北部は砂漠気候、中部はステップ気候、南部はサバナ気候。6～9月は雨季、10～5月は乾期になっている。

地球ギャラリー
Vol.18

Mali
マリ

Illustration / Hori Takao



アフリカの中で
綿花の輸出量第2位を誇り
国の産業を支える柱となっている。

マリ出身の世界的歌手、サリフ・ケイタ。
アルビ（先天性白皮症）であり
同じ境遇の人々への支援にも取り組む。



マリ料理 オクラの特製ソースで パワー全開 「ガンナ」



マリの主食といえば、「コメ」、ヒエの粉を団子状にした「トオ」、北アフリカのクスクスに似た「フオニオ」、フランス植民地時代に定着した「フランスパン」などが一般的。主食とともに食されるソースのバラエティーは豊富で、中でも代表的なものが「ガンナ」である。

地元バンバラ語で、「ガン」はオクラ、「ナ」はソースの意味。国内で取れる野菜の種類が少ない中で、オクラは年中収穫できる。4～5月の乾期には気温が50度以上まで上がり、厳しい暑さで食欲も減退するが、アツアツごはんはガンナをかけ、二枚のお皿をみんなで囲んで食し、元気を取り戻す。大人も子どもも大好きな一品。

（ガンナ）

【材料（3人前）】

オクラ300g／牛肉150g／トマト・ピーマン各2個／タマネギ小1個／セロリの葉1本分／んにく3片／発酵豆または納豆大さじ3／煮干し3本／ローリエ3

枚／トウガラシ1本／バーム油大さじ1／サラダ油100ml／黒粒コショウ小さじ1／粉コショウ小さじ2／トマトピューレ大さじ1／コンソメ2個／鶏がらスープの素大さじ1／水500cc

【作り方】

1. サラダ油と一口大に切った牛肉を鍋でいため、表面の色が変わってきたら黒粒コショウ小さじ1、粉コショウ小さじ1を入れる。
2. 肉に火が通ったら、大きめにみじん切りにしたトマトとピーマン、トマトピューレ、ペースト状にしたセロリの葉、コンソメ1個、鶏がらスープの素を入れ中火で煮込む。
3. 煮立ってきたら、2ミリ程度に輪切りしたオクラ、水を入れ強火で沸騰させる。
4. オクラが全体になじんできたら、コンソメ1個、すりつぶした煮干しとローリエ、トウガラシ、大きめにみじん切りにしたタマネギ、ペースト状にした発酵豆と一緒に、粉コショウ小さじ1を入れて煮込む。
5. 表面に油が浮き上がってきたら、バーム油を入れ味を調えて出来上がり。



アツアツのガンナごはんをおいしそうに食べる子どもたち

文・写真＝齋藤由紀子
（JICA専門家）

日本人の「人を助ける心」

阪神・淡路大震災から15年がたち、その追悼行事が行われる5日前に、中米カリブ海の小国ハイチが大震災に襲われました。壊滅的な惨事が突如発生し、現場はまさに阿鼻叫喚、地獄絵図さながらの様相を呈しました。その犠牲者の数は、阪神・淡路大震災の約30倍の20万人以上といわれています。今回の悲劇が他のケースと違ってさらに深刻だったのは、首都が直撃されたこと、政府庁舎や病院施設などを含むほとんどの建物が全壊してしまったこと、水、電力、電気通信、インフラなどのライフラインが壊滅してしまったことです。

被災地に派遣されたJICA国際緊急援助隊医療チームは2週間にわたって懸命に負傷者を治療しましたが、重症患者を診て緊急の手術が必要と判断しても、その設備を備えた搬送先の病院施設がなく、目の前で亡くなっていくのを座して見ているしかないという人道的な立場からは耐え難いジレンマにさらされました。自衛隊の医療チームに引き継いで帰国した各隊員の表情が、いつになく悲しみに満ちていたのはそのためだったと推察されます。しかし反面、次に派遣されるときは同じ事態は繰り返すまいという強い決意も見えて取れました。

普段はその国がどこにあるのかも知らないで暮らしている私たち日本人も、一旦そこで災害が起こると放っておけない気持ちになります。人を助けたいと思う心は理屈ではありません。それは私たち日本人が受け継いできたDNAのようなものではないでしょうか。日本という国が、これからも「助っ人ジャパン」として世界に貢献していく道を歩んでいくことを願っています。

広報室長 力石寿郎

本誌へのご意見・ご感想や JICAへのご質問を お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2010年4月15日

Email: jica@idj.co.jp

FAX: 03-3582-5745 (『JICA's World』編集部宛)

- ① フェルトの小物
- ② 書籍『南アフリカの衝撃』(p30参照)
- ③ 書籍『世界を変える! みんなの力』(p30参照)
- ④ 書籍『ラララ親善大使』(p40参照)



①



②



③

④

本誌をご希望の場合は
送料ご負担(200円)にて
お送りいたします。

申込方法

氏名・住所・電話番号・ご希望の号数もしくは送付期間を明記の上、下記にお申し込みください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 業務部(発送代行)
住所 〒107-0052 東京都港区赤坂2-13-19 多聞堂ビル
TEL 03-3584-2191
FAX 03-3582-5745
Email order@idj.co.jp
支払方法 「ゆうメール」の着払いとなりますので、
本誌と引き替えに200円をお支払いください。



次号予告 (2010年4月1日発行予定)

スポーツと国づくり

心身を鍛えるのみならず、貧困削減や経済成長への可能性を秘めたスポーツ分野の取り組みを特集します。

JICA's World

MARCH 2010 No.18

編集・発行／独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル1～6階

TEL: 03-5226-9781 FAX: 03-5226-6396 URL: <http://www.jica.go.jp/>

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

地元女性のアイデアでフェルトの小物がヒット商品に！

ナイロビ近郊のマトマイニ・チルドレン・ホームの一角にあるマトマイニ工房。女性たちがゾウやキリンなど動物型のスポンジにチクチク針を刺している。反対の手には色とりどりのフェルトが。見る見るうちに、かわいらしいぬいぐるみが出来上がっていく。

一方、工房の外では、別の女性たちが手のひらをクルクルさせている。「フェルト玉よ」。そう言うのはにかむ彼女たちに、NGOセーブ・ザ・チルドレン・センター（SCC）代表の菊本照子さんが優しいまなざしを向ける。「やっとヒット商品が生まれたんです」。

もともとスラムの子どもたちの教育支援からスタートしたSCC。その後1987年に孤児院を設立、100人以上が巣立

っていった。「でも、ずっと支援を続けられるわけではない。地域で子どもたちを守り育てる力をつけなければ」。そんな思いで22年間、シングルマザーや貧困女性の収入向上を目指し、モノづくりに挑戦してきた※。

最初は失敗の連続だったが、彼女たちのアイデアも織り交ぜながら“細く長く”続けてきた結果、カラフルなフェルトのキリンが誕生した。「こんな奇抜な色、売れるはずがない」という菊本さんの思いはうれしい方向に裏切られた。彼女たちの自由な発想が、スタディーアールで孤児院を訪ねる若い日本人女性の心を次々に射止めたのだ。今では、フェルト玉のネックレスや携帯ストラップとともに、注文が相次ぐ。

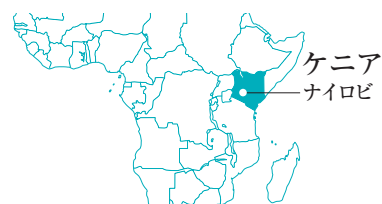
原料はケニア山のふもとに生息する羊の毛。自然にやさしい草木染めにもチャレンジしている女性たち。いずれ売り上げで孤児院の生計が立てられたら。菊本さんの夢は広がるばかりだ。

※2001～06年はJICAと連携して、4つのスラムで住民の生活向上を支援。



キリン型のスポンジに色のフェルトで模様を入れていく

★フェルトの小物（ぬいぐるみ、ネックレス、携帯ストラップ）を各1人にプレゼント。詳細は38ページへ→



助け合いの精神を大切に

女優 紺野 美沙子

KONNO MISAKO



©Shinji Shinoda / UNDP Tokyo

PROFILE

東京都出身。慶應義塾大学文学部卒業。1980年、NHK連続テレビ小説「虹を織る」で人気を博し、テレビ、映画、舞台などで幅広く活躍。2010年3月末から語学番組「ギフト〜E名言の世界」(NHK教育)に出演。98年より、国連開発計画(UNDP)親善大使を務める。著書に自身の途上国訪問についてつづった「ラララ親善大使」(小学館)など。

★著書を5人の方にプレゼント! 詳細は38ページへ

国連開発計画(UNDP)の親善大使のお話をいただいた時、突然のことで「本当に私でいいの?」という気持ちでした。それまでは、途上国とは無縁、英語も苦手。でも人生一期一会、何かのご縁と思って、お引き受けすることにしました。

親善大使として、初めて訪問した国がカンボジアでした。行くことが決まって、まず私がイメージしたのが「地雷」。テレビで見たことはあったものの、実物を目の前にして、そして、地雷の被害者の方々と話をし、一気に「現実のもの」として身近に迫ってきたんです。どこか遠い国の話ではない、同じ地球上で起こっている私自身の問題でもあるんだと一。ショックでした。

ある時、エイズで両親を亡くしたガーナの少年に言われたことがあります。「親善大使さんが来てくれたか

ら、僕たちはもう大丈夫!」。この子は今日の前で、私に助けを求めている。でも、私がこの国にいられるのは1週間程度です。現地に残って、彼らと一緒に汗を流して生きていくことはできない。でも思ったんです。私には、彼らの現状を日本に帰って“伝える”ことができると。彼の言葉は、『ラララ親善大使』を出版するきっかけにもなりました。

初めてアフリカに行くことになったとき、正直少し不安がありました。地理的にも遠いし、歴史も文化もまったく違う。でもガーナで、とある村の婦人会の女性たちに会って、そんな思いは一気に吹き飛びました。本当に明るくて、優しく、近所のおばちゃんに再会したような懐かしさを感じたんです。「人間どこにいても同じじゃない」。ただ、取り巻く環境が違うだけなんです。

一方で、途上国には助け合いの精神が深く根付いているような気がします。「困った時はお互いさま」。現代の日本で、失われつつあるものではないのでしょうか。私自身も、毎回彼らからたくさんのことを学んでいます。

「貧しい国」の状況について理解することは、容易ではありません。でも日本の子どもたちには、日本がいかに恵まれた国であるか、そして、私たちの暮らしも途上国の資源や人々に支えられて成り立っていることなどを、自分の頭で想像できるようになってほしいと思います。

現場で青年海外協力隊の人たちに会うたびに「日本の若い人も頑張ってるじゃない!」とうれしくなります。これからはもっともっと、若い人が新しい発想で、国際協力に自然に取り組んでいってくれるような社会になればと願っています。